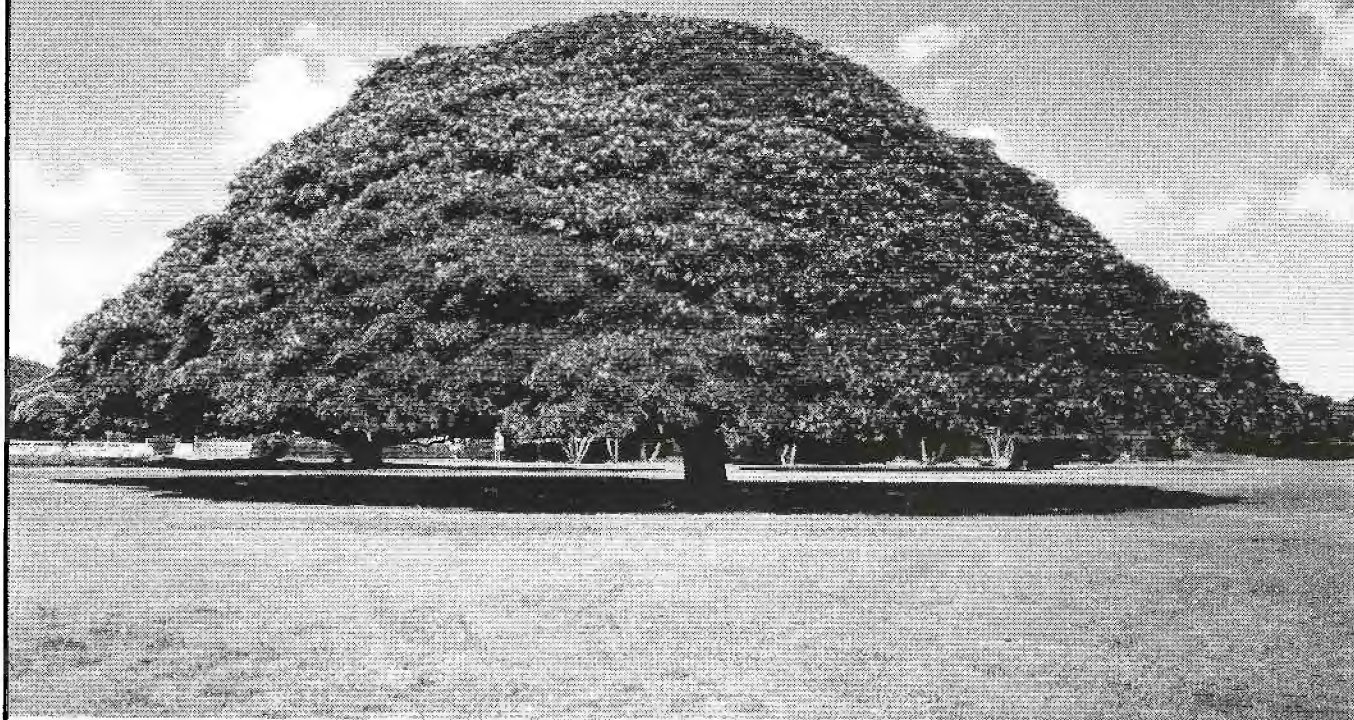

HITACHI

巻頭言

ハンドボール協会の還暦を期に新しくスタートをきろう

—古くからの諸問題の再認識をふまえて—



佐野　和夫

送球（そうきゅう）協会となって陸連から独立して60年を経た。人生の還暦である。今までたくさんの先輩が築いてくれた歴史を、60年の節目として新たにスタートをきると考えれば大事な年になる。この年にふさわしく男子世界選手権大会が熊本で行われ、世界中の関係者の絶賛を得て終った。私達はこの大会で世界中のハンドボールを知り、多くの事を学ぶことができた。そのことは今後の発展に生かさねばならない。

ハンドボールの発展のためには、底辺の拡大、頂点の強化、財源の確保、広報活動、競技運営、審判技術の向上、国際化、その他ハンドボールに関わる全てが、鶏と卵の関係であり、一つの歯車が回転することで全てが連動して回るとも考えられる。

協会が創立以来変わらず持ち続けている目標の一つは「頂点の強化」である。ハンドボールが行われる限り続けねばならない目標である。熊本で活躍した全日本チームや、IHFの機関誌でとりあげられるような名選手が育っている。このことは強化の成果である。今後の目標は世界大会でメダルを得ることであり、すでに射程距離に入っている。全日本男子監督の蒲生氏はじめ、チームリーダーの方々に期待したい。チームの育成に関しては世界の流れを汲んで対応されるだろう。私達は期待するだけでなく国全体での支援態勢をつくることが活躍の大きな力になると確信している。メダルの獲得は、斯界の活性化につながることは自明のことである。

活動を充実させてゆくためには、より多くの「財源」を確保せねばならないが、今日の不況時代には難しいことであり、関係者の頭痛の種である。現在は各層の登録費や、日本リーグへの参加企業に負うことが多い。みんなの英知を集めて思いきった財源確保の対策を考えてゆく必要があるだろう。

「指導・普及」についても疎かにはできない。少子化の時代であり、スポーツ人口は激減していると言われている。ハンドボールの発展は学校体育の中から始まっているし、現在も手ほどきは殆ど学校で行っている。近い将来には時代の変化、世界の動向とともに変わる方向がみられる。その対応策について急がねばならないだろう。

この他にも、定款の検討をはじめ、対マスメディア、競技運営のあり方、審判技術の向上、世界情勢の把握、ゲームそのもののあり方など、流れに遅れてはならない多くの問題がある。今まで述べてきたことは全て新しい問題ではない。

還暦を期して新しくスタートするに当たり、既に言われ続けてきた問題について、常に意識の片隅に置いていただくために述べさせていただいた。

関係各位のご理解とご支援をこれからもお願い申し上げます。

協会だより

平成9年度12月常務理事会

日　時　12月13日(土)
10時30分～15時00分

場　所　南青山会館会議室

出席者　専務理事、常務理事5名、参事1名、事務局2名、委任2名

1　日本協会60周年記念事業について

(1)記念冊子について
目次及び執筆者について、依頼と経過報告
名刺広告について協議

(2)記念式典・記念品等について
記念式典の開催日、時間、会場、出席者、会費及び記念品について協議

2　第50回(平成10年度)全日本総合選手権大会について

兵庫県協会、NHKと調整済みであることが報告され、平成10年12月23日(水)から26日(土)神戸市で開催することを了承。

NHK放映は最終日に全国放映で実施できるとの報告があった。

JOCジュニアカップと開催時期について、調整することとした。

東京体育館については、予約を取り消さず、フェスティバル事業等を企画することとした。

3　ハンドボール知名度アップのPR策について

PR策の一環としてのフォトコンテスト実施について、募集条件、作品の権利は日本協会が取得する等確認して、10万円の予算で活動することを了承。

4　普及・指導事業に関連して

(1)普及委員会
強化委員会と共同事業として位置付け、ナショナルチームスタッフの参加を依頼し、底辺強化を推進。

(2)スポーツ指導員養成について
C級スポーツ指導員養成に関して報告。

(3)西日本兼中国ブロック小学生ハンドボール大会について
岡山県で開催する大会について、日本協会主催を承認。

(4)ワールドゲームズ2001ビーチハンドボールについて
秋田県で開催の意向があり、普及委員会で推進することとした。

(5)選抜チーム、クラブチーム対象の国際大会(1998年3月)の参加案内についてインターネットで紹介することとした。

5　AHFからの1997～98年のイベント案について

第5回アジア女子ジュニア選手権、第6回アジア男子ジュニア選手権の開催提案に対し、国体予選と重なるため、9月開催を申し入れる。アジア大会、その他についてはIF案通りで通知する。

6　平成10年度部門別事業計画、予算について

各事業予算について、8～9年度並みの予算を参考に、提出依頼がなされた。

7　日本協会表彰制度について

表彰規定(案)を基に協議、叙勲も含めてさらに表彰全般について検討することとした。

8　日本リーグ開催権料について

平成10年度よりの値上げを了承した。

【報告事項】

1　第13回女子世界選手権大会報告

2　第49回全日本総合選手権大会(男子の部)報告

3　第22回日本リーグプレーオフ実施要項について
平成10年2月28日～3月1日に駒沢体育館で実施。
特別協賛を全日空に打診中であることを報告。
宮家ご観戦に関して、了承。

4　日本リーグ分担金について報告があった。また、男子2部リーグ、女子1部リーグのチーム数計画について報告があった。

'97日本スポーツ賞

全日本男子ハンドボールチームが競技団体別最優秀賞を受賞

「日本スポーツ賞」は昭和26年に読売新聞社が制定、毎年、わが国のスポーツ全47競技団体から推薦された優秀選手、またはチームの中から「日本スポーツ賞委員会」により慎重な選考を行い、日本スポーツ界の最高の選手またはチームを選び、栄えの「日本スポーツ賞」受賞者を決定する。'97年度は第15回男子世界選手権に出場した全日本男子ハンドボールチームが受賞。代表として酒巻清治コーチが出席した。競技団体別最優秀選手、チームに記念トロフィーと賞状の贈呈があった。

初の外国人監督としてオレ・オルソン氏を招き、メンタル面での徹底的な強化、体格・体力面の向上、強化合宿の積み重ね等を図った。５月に熊本市内の三市四会場で16日間にわたり20万人の観客が見守った'97男子世界ハンドボール選手権大会ではその成果を上げ、予選リーグを４位で抜け、念願の決勝リーグに進出。決勝一回戦で対戦した前回優勝のフランスチームには21－22で敗退したものの、ゴールキーパーの橋本が素晴らしいキーピングを見せ、互角の戦いをした。

監督：オレ　オルソン
野田　清、田口　隆、酒巻清治、栗山雅倫、坂口　満、生田拓也、西村英治、西山圭介、橋本行弘、四方　篤、高木浩司、魚住和彦、佐々木教裕、冨本栄次、中山　剛、岩本真典、末岡政広、永山　強、藤井孝志、杉山裕一、茅場　清、山口　修、辻　昇一、角谷裕司



全日本実業団ハンドボール大会 チャレンジ'98

熱戦グラフ



デンソー対本田熊本、武田選手のミドルシュート



ブラザー対自衛隊、河竹選手のシュート



三景対本田熊本



三景対本田熊本、久野選手のポストプレー



大和対ソニー国分、藤浦選手のシュート



トクヤマ対三景、広中選手

全日本実業団ハンドボール チャレンジ'98

[男子の部]



〈順位決定戦〉

■5位決定戦
香川銀行T・H 20 (10-1, 10-4) 5 ムネカタ

■3位決定戦
自衛隊体育学校 16 (8-8, 8-6) 14 ブラザー工業

■決勝戦
大和銀行 25 (12-14, 13-8) 22 ソニー国分

[女子の部]

〈予選リーグ〉

●Aブロック

順位		大和	自衛	ムネ	数	勝	分	敗	得点	失点	差	点
1.	大和銀行	**** **** ****	30 ○ 22	27 ○ 7	2	2	0	0	57	29	28	4
2.	自衛隊体育学校	22 ● 30	**** **** ****	24 ○ 16	2	1	0	1	46	46	0	2
3.	ムネカタ	7 ● 27	16 ● 24	**** **** ****	2	0	0	2	23	51	-28	0

●Bブロック

順位		ソニ	ブラ	香川	数	勝	分	敗	得点	失点	差	点
1.	ソニー国分	**** **** ****	20 ○ 16	19 ○ 12	2	2	0	0	39	28	11	4
2.	ブラザー工業	16 ● 20	**** **** ****	19 ○ 14	2	1	0	1	35	34	1	2
3.	香川銀行T・H	12 ● 19	14 ● 19	**** **** ****	2	0	0	2	26	38	-12	0

※勝敗（○△●）の上が得点、下が失点を表す。

'97女子世界ハンドボール選手権大会観戦記

駒場　和夫

今般、日本リーグ海外研修制度の第一次研修員として、ドイツにて開催された'97女子世界ハンドボール選手権大会を観戦見学をしてきた。

11月29日、ルフトハンザ航空の飛行機で成田空港を出発し、12時間10分のフライトで、ドイツの表玄関と言われているフランクフルト空港に到着。更に、飛行機を乗り継いで45分、人口52万人を誇るスツットガルト市の近郊にあるスツットガルト空港に降りた。先に全日本選手の添乗員として来独していた岩崎さん（エモック・エンタープライズ社）が出迎えに来ており、同じ飛行機で同乗してきた熊本日赤病院の佐久間医師も紹介され、一緒に車で全日本選手の宿泊しているシンデルフィンゲンと言う町にあるホリデーインホテルに到着した。日本で言う高速道路にあたるアウトバーンを通って約20分の道のりであったが、制限速度表示のない所は無制限速度で良いとのことであり、雨上がりの夜間、ビュンビュンとばして脇を追い抜いていく車を見ながら、後部座席に乗っていて車のスピードに恐怖感を覚えた。

ホテルのフロントロビーにて関西空港からミュンヘン経由でスツットガルト空港に着き、空港からレンタカーを借りて来た緒方氏（大和銀行）、荷川取氏（北国銀行）ら一行を待って車に乗せてもらい、同じジンデルフィンゲンの町にあるアストロンホテルに到着、チェックインした。自宅から成田までを含めると15時間の移動時間でもあり、やや疲れたのか、慣れないベッドも気にならずぐっすり眠れた。

いよいよ30日の朝となり、6時30分に起床。表は真っ暗なためやや明るくなり出した7時半頃、毎日の日課としているジョギングに出た。昨日来た時は夜だったため周囲の景色が分からなかったが、ホテルの周囲を約一時間ジョギングし確認すると共に本日の夜、ドイツ－日本のオープニングゲームが行われるグラスプラスト体育館の近くまでジョギングしおおよその場所を確認してきた。

体育館まではホテルから車で7～8分であったが、日没が早く4時頃には暗くなりだして、体育館に行った17時頃は暗闇となっていた。開幕ゲームとあって約一時間前に体育館に行ったが、車が次々と入ってきて駐車場はほぼ満杯に近かった。駐車場から体育館までの通路は暗く、入口付近にドイツ語で書かれた看板（表示板か。観客と選手役員の入口表示のようにも感じられた）があるだけであった。会場内は禁煙のため、入口付近には沢山の喫煙者、更にはチケットを買い求める人でごった返していた。また、ダフヤらしき人もおりハンドボールがメジャー化されていることを実感した。人混みを分け入りながら更に入ると、入口でパープル色のトレーナー（世界選手権用トレーナー）を着た中年男性4～5人がチケットもぎりをしていた。

会場のグラスプラスト体育館は室内競技場になっており、フィールド内にタラフレックスを敷いたコートが設置され、周囲3面に広告ボードが置かれていた。またサイドライン側の広告ボードは、電動で広告が変化するものであった。トラックは軽い傾斜になっているため観客席はなく、一番外側のトラックライン沿いから観客席となっていた。A～Tブロックに分かれており、収容人員は７０００人とのことであった。私達の予選最終日のチケットは、立ち見席となっており収容人員の７０００人は立ち見席を含めてのことであると思った。勿論、開幕ゲームのドイツ－日本戦は、我々は指定席で見られたが、日曜日の夜でもあったせいか立ち見も出る満員の状態となった。私達の席はトラックのカーブにかかった所で、コートエンドラインの斜め後ろで防球ネットにかかって見辛い位置であった。それでもチケットの表示金額は15ドイツマルク。日本円で１２００円となるが、良くこんなに人が入るなあ、と感心させられた。因みに日にち毎にチケットの金額が違っていて、第二日目と第三日目が30ドイツマルク（２４００円）、第四日目の土曜日のチケットは帰朝後紛失し不明、第五日目の日曜日の最終戦が立ち見席で10ドイツマルク（８００円）となっていた。

係員にチケットを見せ、席を確認し着席すると、もう既に開幕セレモニーが始まっていたが、ドイツ車の二大メーカーであるベンツ社とポルシェ社のオープンカーに乗った人を先導に出場各国選手の入場となった。コート中央に各国の国旗を持った人の輪ができ、その輪の中に黄色、赤のトレーナー姿の子供たち（小学校低学年生）が遊戯をして見せていた。

ドイツ－日本戦は、入場者の数にリンクしてトランペットとサイドドラムによる応援団の他、空きペットボトルを太鼓代わりに叩く



子供、更に別のトランペットを持ち込んだ人らの応援、時折彼らのリズムに合わせてウェーブが起こり会場内を何周もウェーブが回るなど、「これが本場のハンドボールなのか」と感じたのと熱気にいつしか吸い込まれていた。周囲の人を見渡すと大人はワインやビール、子供はコーラやスプライトを飲みながら日本で言うプロ野球を見る感覚で楽しんでいると感じた。試合結果は、前半7—16、後半10—16、計17—32で大敗し、力の差をまざまざと見せつけられた。ドイツチームの選手構成は、ドイツのブンデスリーグのクラブ人と学生が9名、4名が帰化した人であるとのことであった。メンバーの中には、ポストを守る32才のキャプテン、エルラー選手を含む30代の選手が3名入っていた。翌1日の朝、近くの駅のキヨスクへ新聞を買いに行ったら、中ページに挿入されたスポーツマガジンのトップ記事で写真は白黒であったが、25×12cmの大きな写真入りで試合内容が掲載されていた。これにも、ドイツでのハンドボールがメジャー化されていることが伺い知れた。

　第二日目の12月3日は第一試合の日本—オーストリア戦他3試合が組まれていた。各試合の開始時間は2時間おきとなっており、試合と試合の合間の時間がややあり過ぎる感じもした。日本—オーストリア戦は前半の5点ビハインドを後半追い上げるが身長180cm以上の選手で占めるオーストリアは、ただ一人小柄な168cmのサイドプレーヤーがいるが動きが良く、大事な所で速攻を決めていた。この試合も16—23で負け二敗目を喫した。第三試合のアンゴラ—ドイツ戦はテレビ中継があるとのことで、19時からホテルに戻ってテレビで観戦した。前述した応援団のメロディーが丁度試合中継中の選手の動きとマッチングしてゲームを楽しく見せており、テレビ局の回し者かと思える程であった。

　第三日目の日本—ブラジル戦も、12月4日の第一試合で17時30分から開始された。この試合は、田中美音子選手のミドル、田中美代子選手のロングが大事な所で決まり25—21で勝ち一勝目を飾った。第二戦目の時、井副団長のIDカードを借りて殿水常務理事の案内でVIPルーム他、会場内の施設を見て回った。VIPルームは腕にビニール製の腕輪をした人しか入れないようになっていたが、ある程度のお金を支払えばVIPルームに入れるようであり、差別した感じがなくて良かった。室内には食事、飲物等が用意されていることは日本（ドリームゲームなど）と同じだと思った。記者会見の部屋はテーブル上（主賓席）に飲物等が並べられており、飲物の代わりにチーム旗のような物であればなお盛り上がるのでは、と思いつつ部屋を出た。記者室にあった記録用紙らしき物（あまりにもあっさりしているので記者用にも思えたが）のコピーを資料として持ち帰ったら、日本—ブラジル戦の観客数が800と書かれてあった。

　第四日目のアンゴラ—日本戦は、12月6日の第二試合で18時からであったが、第一試合のドイツ—ブラジル戦の後であったので、そのまま残ってアンゴラ—日本戦を見る人がいて比較的入場者数も多かった。ドイツの人は、ドイツの試合だけを見る人が多く、第三試合目だったりすると一、二試合目は空席が目立ち、ドイツ戦になると席が埋まるようになっていた。試合は、前半日本が1点リードして折り返し、後半、アンゴラ選手が2名怪我で退場してゲームは日本の優勢であったが、代わりに出てきた選手の動きの方が良く、かえって試合の流れがアンゴラに移ってしまい30—30の引き分けに終わった。黒人の粘りとパワーに驚かされると共に、脅威に感じた。

　会場内の電光掲示板には、ハーフタイム時などに他会場で行われているBCDの各グループの試合結果が表示され、Cグループの韓国が4戦全勝、Dグループの中国は4敗していることが分かった。今回の研修にあたり他の会場も見てみたいと思ったが、試合が大体夜間に行われることと他会場までのアクセスが不便（行き方が分からないのも含む。もっとも地図が分かり自分で車を運転できれば別であるが）であること。また、ガイドブックなどを読むと深夜のホテルチェックインができない所もあるとのことなのでためらった。結局、最後までジンデルフィンゲンのAグループのみの見学となった。

　予選第五日目の試合は、12月7

日の第二試合でポーランド—日本戦であった。この試合に勝てば上位4チームに入り決勝トーナメントに進める試合であったが、17—23で落とし通算成績1勝1分け3敗で第5位となり、決勝トーナメント進出はならなかった。Aグループの成績は、1位ドイツ、2位オーストリア、3位ポーランド、4位アンゴラ、5位日本、6位ブラジルの順位となった。

　Aグループの試合が行われたジンデルフィンゲンの町は人口6万人を有し、従業員が3万人いると言うメルセデスベンツ社もあって「サラリーマンの町」と言う感じがした。7000人もの観客はどんな人で何を見て集まるのかな、と疑問に思ったが、多くの人はジンデルフィンゲンの人で近郊からも観戦に来ているとのことであった。町の中には世界選手権大会のポスターはなく、クラブを通じての口こみと新聞、雑誌などで知り集まってくるとのことであった。初めてのドイツであり、見る物全てが初めてで感激の連続であり有意義な研修であった。今後、深めた知識をリーグ等に生かして行きたい。

　以上、研修レポートと致します。有り難うございました。



デンマーク　C.アンデルセン選手ロングシュート

光島　磯雄

　12月4日大阪を狩野、加藤、山中氏とともに出発し、同日夜ミュンヘンに到着し、バイエルン地区審判部長であるデイーター・ルダート氏の出迎えをうけて数日前に降り積もった雪景色の中にあるなかなか上等といえるホテルに案内された。直ちに町へ繰り出しルダート氏の案内でミュンヘンのドまんなかの「これが本当のバイエルン式レストラン」で夕食、もちろんビール付き。ここでルダート氏は来年のドイツにおけるブンデスリガ関係のレフェリー研修会の予定表を示して、もし日本から聴講参加希望があればゲストとして迎えることにするから考えてみてはどうかとの好意ある発言あり。

　ルダート氏とはもう20年近くにもなる交友関係で常にドイツ人の「ガストフロイントリヒカイト」（遠来の客や友人に対する親愛溢れる態度）を惜しみなく発揮してくれる紳士で、現在は環境汚染防止対策技術の専門技師として世界各地に出張し活動している。もちろん英語フランス語はいうまでもなく堪能。10年程前にすでにレフェリーを引退したが、今もなお研修や理論著作などに重要な役割にある。

　翌5日は我々だけで市中を散歩、クリスマス装飾に彩られた旧市役所前の広場は仮設の店舗が沢山立ち並び景気付けの声と買い物客が賑やかにやりとりする中で歴史的名物の「市役所塔屋の動く人形」を見上げて焼き栗を頬張り、気温零度の「陽気」を満喫した。

　6日9時、またもやルダート氏の車によりミュンヘン中央駅へ送ってもらいドイツ国鉄自慢の特急列車「ICE」に乗り込みシュツットガルトへ約2時間の旅。この列車は日本の新幹線よりはるかに座席に余裕あり快適そのものの感じ。シュツットガルト駅にはドイツ協会の人が迎えてくれて車でジンデルフィンゲンへ。ここで日本チームの宿泊ホテルを訪ね、樫塚氏から所謂日本でいう「IDカード」（ドイツ語での意味では入場資格承認証）を受け取った。実はこれは1日30スイスフラン、約3000円、終りまで見る費用は約3万円払わなければならぬわけで、なかなか良い考えでやっておるものだと、熊本大会の時を思い出した次第。

　残雪の凍り付いた道を踏みしめ、畑のなかにあるような体育館「グラスパラスト」に向かったが、ドイツチームが出るので人の列は延々と続き、館の入り口はあたかもお祭りのような賑やかさ。満員の館内が唸り声を挙げて膨れ上らんばかりの盛り上がりは、ヨーロッパそれもドイツならではの感ありいつ来てもただため息がでる。

　オムロンの井氏から聞いたとおり、今回の大会はアフリカ大陸代表の進境ぶりは刮目的なものがあり、近い将来目を離せない存在となるであろう「アンゴラ」と日本チームの試合、草原や山岳を走り回っている逞しさに遂に圧倒された感じで負け同然の痛恨の引き分けにおわり、1点の重大性を心から噛みしめさせられた日本ハンドボールであった。いつもながら古くて新しい問題の解決に向けて再出発しなければならないわけである。思うに「この道はいつか来た道」というよりも、「この道はいつも通る道、そしていつも同じデコボコに引っ掛かって転ぶ道」との表現がピッタリすると言わざるを得ないではないか！ジンデルフィンゲンで以後の試合への資格を閉ざされた日本選手団とわかれて、翌8日再び列車でザールブリュッケン（ドイツ・フランス国境の都市）へ移動、途中フランクフルト空港に後藤登氏を迎え以後同行。

　ホテルバウアーはIHF役員と同宿で知った顔触れと多く接し旧交をあたためる。ザールランドハレで第2次予選観戦。新ルールでのプレイ・レフェリングともに慣熟不十分で従来のやりかたで進行

する場面が多く見られたが、スローオフのときのラインオーバーはきちんと吹いていたし、ベンチがとるタイムアウトやパッシブ予告ゼスチュアなども自然に受け入れられていたようである。スローオフ地点を示すため、センターライン中央が、違う色で約30㎝のラインとなっていたのが目新しい点であった。

この会場で観戦中、下段のスタンドからこちらを見上げてニコニコ笑う女性あり、ハーフタイムとなって彼女近付いて来たのをみておどろいた、なんと10年ほど前「山鹿立石」にいたカーヤ・イレシュではないか！オムロンの井氏からは、ユーゴの内戦あって以来なんらの消息も不明と聞いていたので我々一同等しく驚き入った次第。クロアチアチームの応援にきたとのことでしきりに日本でのことを懐かしがっていた。昔のスラリとした脚の長さは変わらないが上体は恰幅が増して堂々たる感じ。よくぞ戦乱を免れて今もハンドボールに顔を出せる状況にあるとはめでたい限り。強運・幸運な人である。

韓国チームの試合を見たが以前よりスケールが小さくなった感じだが欧州チームと相変わらず互角の戦いぶりは見事なものがあった。まだまだ当分の間日本がこれに肩を並べるには、相当な年数を予想すべきといえるであろう。

準決勝ラウンドはハンブルグ。再び「ICE」に乗って4時間ほど北へ走り冷たい雨のふる中を「クイーンズホテル」にはいる。このときもIHFやDHBと同宿で、熊本で吹いたビュロウ・リュプカーのペア、欧州のレフェリーチーフの役にあるマンフレート・プラウゼ、IHF理事のアレキサンダーコジュコフ（ロシア）とも再会。大阪市と提携関係にあるハンブルグ協会の面々とも会うことが出来て、来年5月のハンブルグ協会創立50周年記念行事としての4国対抗親善試合（ハンブルグ・マルセイユ・サンクトペテルベルグ・大阪）の打ち合せも済ませた。

ハンブルグ体育館はハンドボール専用で、観客収容数4300人でそれも満員札止めの盛況。ここで1967年（昭和42年）ハンブルグ選抜男女チームの監督として来日したヘルムート・トルカ氏の86才ながら元気な姿に接することが出来た。ここでの試合も、まさにヨーロッパ式そのものの、力とスピードと闘争心を100%発揮して勝利を争う「ボルテージ」の高さは天下一品、そのなかでもデンマーク・ノルウエイの北欧勢の攻防集中力はほとほと感嘆するのみ。一昨年、デンマークのハンドボールスクールのアランルント氏から聞いた話が現実に眼前に展開されているのだ。すなわち幼少時代からの環境づくりと動機づけによる段階的トレイニングシステム支援体制整備の成果というわけである。デンマークの子供はサッカー同様、ハンドボールがおもちゃとして買い与えられるというではないか。

12日、ICEならぬ一格下のIC列車に乗って2時間半、ベルリンへ。

ツオー駅（動物園前）で下車し、タクシーで「6月17日通り」から東西ベルリン分断の象徴であった「ブランデンブルグ門」をくぐって、森鴎外の小説でも名高い「ウンターデンリンデン通り」（菩提樹の並木道、プロシヤ時代からのメインストリート）からアレキサンダープラッツにあるホテルフォルムに入る。ここは旧東独の東ベルリン地区の代表的ホテルとして有名だったインターホテルシュタットベルリンの現在の姿で、経営は完全に西欧化して内外部ともリストラ工事の真最中。受け付けで、1974年東独で男子世界選手権大会が開かれたときここに泊まったことがあると話したら、「私はまだ生まれていなかった」


金メダルプレートを手にするアンネ・D.タンデラップ



第4戦、日本対アンゴラの試合

と笑っていたが、彼らとても1989年の「壁の崩壊」がもたらした現状はわかっているはず。ついでに思い出すが、この大会が現在全日本チームの監督である蒲生晴明氏のデビューだったのだ。

会場は旧東ベルリン地区に新設されたマックスシュメリングハレ。順位決定戦と決勝への勝抜戦8試合が行なわれた。

13日、前代未聞の悲劇不祥事が発生した。館内で応援のデンマーク人2人が不良ドイツ人に刃物により殺害されたのだ。役員・選手みな喪章を付け、試合開始前には事件の報告と犠牲者とその家族への黙祷が捧げられ、前日までは盛大に音楽を流していたことも中止される。全館内は警備が厳重となり、役員ラウンジでは酒類の提供はなくなり、出入口での検査も厳重となり通路や観客席は目付きの鋭い警備員が監視にあたる有様。

試合はあいつぐ熱戦の結果、前記の通り北欧の対決となり、デンマークが文句なしの圧倒的勝利となった。赤の応援シャツは歓喜の大渦となり、表彰式は感情を全身であらわして、観客席に特設されたIHF役員席にいるランツ会長のところへあがっていってキャプテンがトロフィーを受け取り、全館内万雷の拍手と歓声に天井が押し上げられそうな雰囲気を感じる。そこで思う、ああ、この日が日本チームにめぐり来るのはいつのことか？とうてい見果てぬ夢か？などと愚痴・ぼやきがでてくる。韓国に出来たことが日本に不可能なのはウオン相場だけが原因なのかとも！

レフェリングの新ルール対応の観察を目的としてドイツへ行った一人として以下にその感想を纏めてみる。

1　プレイヤーもレフェリーも新ルールへの移行過渡期状態で、その慣熟には若干の猶予が必要であろう。

2　チームタイムアウトの取り方は、今後コーチの重要課題として、その適切な活用をはかるであろう。

3　パッシブプレイへの予告ゼスチュアの出し方と、パッシブ判定の笛のタイミングはおよそ3～4回のパスプレイが限度とみられた。

4　スローオフの改正点についての対応は、チームの得点状態（同点か1点差か）と試合時間の残分残秒次第でその雰囲気傾向に影響される場合に問題となるであろう。今大会でも多くは従来どおりのやりかたが普通に見られた。レフェリーのメモとりはスローオフの笛を吹いてからで十分である。ただしスローをするチームの位置どりの観察では、違反はすぐに相手ボールとしていた。

スローオフをする地点を示すために、センターライン中央部分を色の違う30cmほどのラインにしてあったのはうなずけることである。これは国内のレベルでなんらかの取り決めをすれば良いことであろう。

5　今回からセイビングが認められるようになったが、これも北欧のチームは適時適所にとり入れて効果的なプレイにつなぐ場面が再々見られた。

6　レフェリング全般の観察感想について

世界の各地区から選出されて参加しているということは、そのレベルにもかなりの相違があり、熊本のときと状態はかわらない。IHFは2年に1度のシンポジウムで基準を明示しており、レフェリーはそれをもとにして吹笛経験をみがいたうえで評価され、推薦されて来るわけだが、IHFの大会では、「基準」を終始一貫して守り、大きく逸脱することのない（基準から大きく揺れ動くことは最も忌避される）レフェリングを求めていることは明らかである。試合には公式の立会人や観察人はいるものの、必ずしも個々に修正・指導があるわけではなく、極端・異常な吹笛エラーがあれば以後の吹笛は停止となり、帰国を命ぜられる可能性もあるというきびしさも承知しておくべきである。

大きな試合、緊張度の高い試合経験の豊富なヨーロッパ系のレフェリーが優先重用されるのは当然としても、そのレベルに学ぼうとすることは特に重要である。どんなに学んでも「皮相な面」に留まる結果も予想されるが、目標は高くしなければならない。

その他のもろもろのレフェリング問題にしても、十人十色と言って過言でないほど個人差は大きい。いわく、ジャッグルボール・7mスローで足の問題・押す、掴むのアドバンテージ判定の個人差・規定のゼスチュア以外の動作の限度の個人差・サイドのアウターゴールライン付近からのノーマークシュートに対する違反をフリースローにしてしまうなど（現在はゴールエリアの端の方1m付近からでもゴールを決めるプレイヤーはざらにいるではないか）例をあげればきりがない。ルールブックにははっきりと記載されているのだから、IHF・PRCよ、なんとかしてくれないかと提訴・進言してはいかがなものか!? 当面、チームとしてはどんなレフェリーにあ



警備体制も万全であった



第４戦、日本対アンゴラ戦

たっても、その吹笛技術のレベルにあわせて戦うしかないということであり、コーチや監督は勝利を得るためには今よりもっとレフェリングの本質を考えて、レフェリーがへたでも、自分のチームに有利な方向につなぐことを勉強すべきではないか！判定への不満をあらわすのに度をすごすと、オーストリアチームの監督アナトリー・エフトシェンコ（元ソ連監督）のように「失格処分」が容赦なくとられることになる。つい本論の趣旨からはずれて筆が滑ってしまった。

後日発表されるが、今回得た情報の一つに、１９９８年６月と８月にドイツ協会のレフェリー研修会が新ルールの成果をテーマとして開催が予定されており、日本からレフェリー・トレーナーの参加・聴講者があればゲストとして歓迎するとのこと。ドイツ語の素養があるにこしたことはないが、雰囲気の見学・体験・経験を得るには絶好の機会であり、この際一度どんなものか知るためにでも有志の参加をおすすめしたい。

臼井　鉄久

この度、昨年暮れにドイツで開催された第13回女子世界選手権大会を観戦する機会に恵まれました。

ドイツでの開催とあって会場周辺はもとより、入国の第一歩となるフランクフルト空港には大会ポスターやインフォメーションなどさぞかし賑わっているだろう、そう期待したのですが、そのようなものは全く見られず、拍子抜けの感があったのも事実です。ＴＶもＤＳＦというドイツのスポーツ専門チャンネルでドイツ戦を実況中継していたのみで（不幸にして私が宿泊したホテルは入りませんでした）、他局のニュースでも扱いは極めて地味でした。もしもハンドボール観戦が目的でなかったら、大会が開催されていることすらわからない程でした。

大会は予選リーグの最終２日間、Ａ・Ｂ両グループを観戦しました。

Ａグループは地元ドイツが登場するだけあって会場は超満員です。この日は全試合とも５３００人と発表されました。あちこちから観光バスがやって来たのは熊本での世界選手権を思い出しました。

ブンデスリーガのサポーターらしき人がトランペットでロックグループ、クイーンの曲などを演奏して館内を盛り上げるのに一役かっています。

ドイツ対ブラジルは、前半６分には３対２とリードする頑張りを見せたブラジルでしたが、力の差は明らかで徐々に離されました。しかしブラジルもサイドからのシュートになかなかの見応えを感じました。

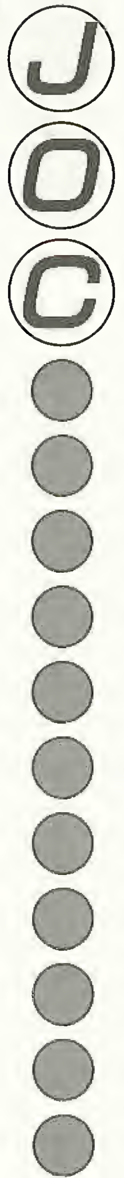
いよいよ日本の登場。アンゴラなら確実に勝てるだろう、そう思って選んだこの試合。日本が４対０と飛び出す最高のスタートです。ところがアンゴラも粘りを見せて、エース・ベンゲの活躍で５対５の同点に追いつくと膠着状態になり、最後までどちらに勝利の女神がほほ笑むかわからない状態。日本はＧＫ山口の活躍でなんとか引き分けにした、といえる一戦。しかし結果的にこの引き分けによって予選リーグ敗退が決定。

ポーランド対オーストリアはオーストリアのディフェンスが悪く、安易に失点を重ねてしまったようです。

翌日はＢグループを観戦しました。カナダ、ウズベキスタンを除く４カ国からサポーターが来ていて、それぞれの応援ぶりもなかなか楽しむことができました。逆にサポーターが来ていない国は１勝もできず、余計にさびしさを感じました。

特に１試合目のベラルーシ対ウズベキスタン戦は観客も９００人と少なく、ミスも多い試合でしたが、３試合目のノルウェー対クロアチア戦は両国サポーターの熱気ものすごく、２３００人の観客で盛り上がりを見せていました。特に私はノルウェーサポーターの真ん中に席があったため、余計に迫力を感じました。

準決勝の最中、館内で殺人事件が発生するなどアクシデントもあり、さらに残念ながら日本は決勝トーナメント進出を果たせませんでしたが、試合後何人かの選手とほんの少しの時間でしたが、話をさせてもらい、これからは女子に対してもっと応援していこう、そう思った良い機会でした。



コーチ会議に出席して

日本ハンドボール協会　医・科学委員会委員　森田　俊介

昨年11月28日、東京にてJOCコーチ会議が開催され、その分科会で、「各競技の医科学の現状と問題点—競技種目別フィットネスチェックを中心として—」のテーマで発表依頼がありました。本委員会で検討した結果、熊本世界選手権大会に向けて男子ナショナル選手が行った体格・体力づくりの内容とその成果について発表することにしました。以下は、当日の口述原稿を要約したものです。

①熊本にて開催された男子世界選手権大会に向けて、日本協会はスウェーデン人のオルソン監督を招聘し、僅か1年4ケ月あまりでしたが、チームづくりを彼に任せ、全面的な支援体制を取ることにしました。今日は、オルソン監督がどの様にして体格、体力づくりを行ったかを紹介いたします。

②監督は、ヨーロッパ選手権大会の参加チームやアトランタオリンピック上位チームの身長と体重を調べ、歴代の日本チームのものと比較しました。そして、身長はやむ得ないとしても、相手とぶつかっても崩れることなく意図したプレーができるように、チーム平均体重を世界レベルに近い88～89kgまで増やすことを考えました。そのためには、摂取カロリーを増やすことに主眼をおいた食事を摂り、ウエイトトレーニングを定期的に行って筋肉量を増やすことの必要性を強調しました。さらにハンドボールに必要な体力要素であるスプリント、ジャンプ、スタミナトレーニングも併せて行うトレーニングメニューを監督自身が作成しました。

③合宿は、一月に1回、10日間のペースで行いました。練習は午前・午後3時間づつ行い、食事は原則として体重1kg当たり60キロカロリー、約5000キロカロリーを練習の合間の簡単な食事2回(各牛乳1リットル、パン3個)と4回(朝、昼、夜2回)の食事によって摂るように指示されています。

④ウエイトトレーニングは、表1の項目についてフリーウエイトで行いました。RMとは重量負荷の強度で、5RMとは、最大に努力して5回程度行うことが出来る重量です。

⑤ハンドボール競技は、10分のハーフタイムを挟んで、前・後半それぞれ30分間行われ、交代選手の人数については制限がありません。競技中の選手の心拍数は180以上になり、血液中の乳酸濃度は30分のうち25分が4ミリモル以上に達する事が報告されています。このことはハンドボール競技が定常運動ではなく、相手と接触しながらダッシュ、ジャンプ、シュートを繰り返して行う無気的な運動であることを意味しております。

⑥ジャンプトレーニングでは、縦方向の10回連続垂直跳び(5セット)、前方向の5段跳び(10回)が行われ、無気的走パワーおよびその持続パワーのトレーニングには、ハンドボールコートを使った20—40—20mのダッシュ、10本インターバルがそれぞれ2日/週の頻度で取り上げられています。後者は一回に要する時間を短縮し、10回のバラツキを出来るだけなくすことが目標です。このバラツキを少なくするためには、高い有気的パワーが必要となり、そのトレーニングとしてスピード漸増による20mのシャトルラン(YO—YOテスト)を行っています。目標値は15—3であり、この値は体重当たりの最大酸素摂取量にしても62ml、12分間走に換算して3250m程度に匹敵します。

　これらの項目については、合宿ごとに、項目によっては1日おき

表1　筋力トレーニングメニュー　　5セット、2日/週

項　目　(目標値)	96/3-7 (準備期)	96/8-12 (維持期)	97/1-3 (鍛錬期)	97/4-6 (仕上期)
ベンチプレス(90-100kg)	5 RM	5 RM	5 RM	5 RM
ショルダープレス(50-60kg)	10 RM			
スクワット(100-130kg)	5 RM			
デッドリフト(100-130kg)	5 RM			
ツーハンズカール(40-50kg)	10 RM			
クランチ(30kg)	20 Kg	20 Kg	20 Kg	20 Kg
	20 T	20 T	20 T	10 T
レッグレイズ(45°、20T)	45°	45°	45°	45°
	20 T	20 T	20 T	10 T
クリーン&シャーク		3 RM		
プルアップ		10 T	10 T	10 T
クリーン			10 RM	6 RM
ジャーク			10 RM	6 RM
シングルレッグ			10 RM	
ステップアップ			10 T	
シットアップ			10 T	

にフィールドテストを行って、トレーニングの成果を検証しました。

次に結果ですが、事情がありまして全期間のデータが手元にありませんのでキャンプ前半のものについて紹介します。

⑦最終メンバーに残り、全期間を通して測定した13名の体重は少ない人で2kg、多い人で10kgの体重増加があり、平均して5kg増加しました。はじめの頃の体重増加は、皮下脂肪量の増加であり、筋肉量の増加は後半になって見られたようです。超音波で調べた結果では、皮下脂肪は主に背中の部分に付き、筋肉は大腿・下腿部の後面に付いていることが高橋らによって報告されています。

⑧最終メンバーに残り、全期間測定した10名では、垂直跳びが4・5cm、立ち5段跳びでは70cmの増加が見られました。垂直跳びの成績はジャンプパワーの指標として長年採用されていますが、シュートの時に高い壁を越えてシュートしなければならない競技形態を考えると、助走付きの片足ジャンプの成績の方がより競技と直結した項目といえます。今後は両者の測定を検討しております。

⑨図1は9名の20－40－20mダッシュの結果です。短い期間ですが、ベストタイムの平均値と10回の平均値も高まっていることから、無気的走パワーとその持続パワーも高まっていたことが分かります。しかし、体重増加に伴って5回目以後に回復が遅くなるためか、タイムが悪くなる傾向が見られます。

⑩休息時間中の回復能力の指標となる体重当たりの最大酸素摂取量は、トレッドミル走では15名の平均値が52・0mℓ(4月)から49・1mℓ(11月)に減少し、またYO－YOテストのスコアーからの推定値でも減少していることが分かります(図2)。このことから、体重増加に見合った有酸素パワーの増加はみられず、このことは前述のダッシュ10本の後半の部分の回復が遅かったことと関係があるかもしれません。

⑪大会前には、メディカルスタッフの協力を得て合宿、海外遠征を多数行いました。表2は整形外科関連の主な傷害です。手術は5名について行いましたが、全員が戦列復帰する事が出来ました。今年度の特徴は、腰痛による離脱者が極めて少なかったことが挙げられます。これは筋力トレーニングによる腹筋・背筋の筋力強化の成果とトレーナー、ドクターの支援体制が例年以上に確立していたためと考えられます。

従来、フィットネスチェックは実験室項目が中心となっていましたが、オルソン体制下ではそれらに加えて、競技に直結するトレーニング項目そのものをチェック項目として採用し、またそれらには明確な目標値が設定されました。そのため、現場で、チェック回数をこれまで以上に増やすことができ、選手も競技をイメージしながら測定とトレーニングに取り組むことができたと思います。これらの点は、今後大いに参考にしなければならない点だと、考えられます。

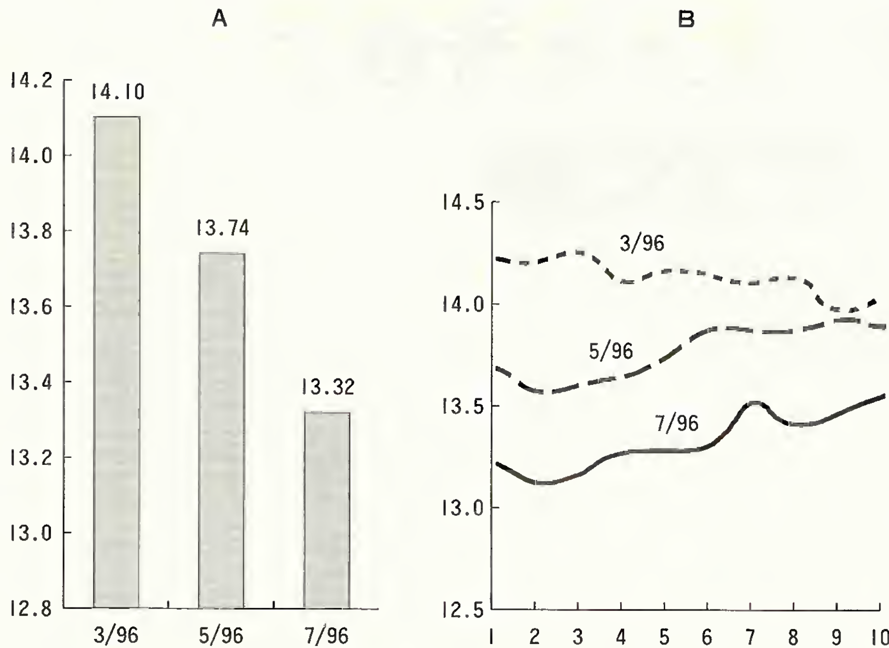


図1　20-40-20mインターバルダッシュタイム

A：9名のベストタイム平均

B：9名の平均タイム10本推移

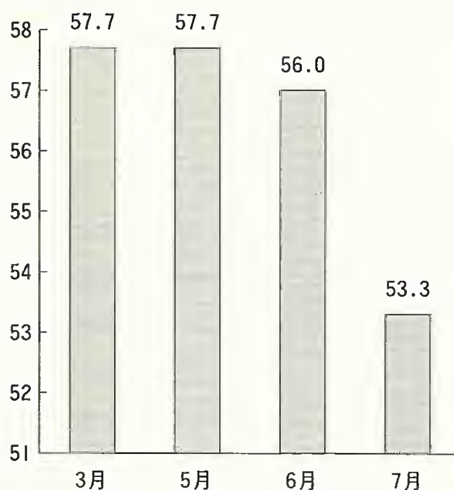


図2　YO-YOテストから推定された体重当たりの最大酸素摂取量

表2　整形外科関連の主な傷害

足関節内の骨棘切除	2名、手術
右示指関節解放性脱臼	1名、手術
腰椎椎間板ヘルニア	1名、手術
足関節足根管症候群	1名、手術
膝前十字靱帯損傷	2名
肩関節脱臼	1名
肩鎖関節脱臼	1名
足関節捻挫	18名／25名
手指関節捻挫	8名
四肢の打撲	15名
アキレス腱炎	5名
腰痛	7名

平成9年度 学連優秀選手

男子

	氏名	所属大学	選考対象		氏名	所属大学	選考対象
GK	黒川博之	早稲田大学	全日本学生選手権大会	CP	佐藤正志	中央大学	東日本学生選手権大会
CP	田中将	日本体育大学	全日本学生選手権大会他	GK	倉昌宏	大阪体育大学	西日本学生選手権大会
CP	田場裕也	日本体育大学	全日本学生選手権大会	CP	竹下浩雄	大阪体育大学	西日本学生選手権大会
CP	谷口了	日本体育大学	全日本学生選手権大会	CP	小林貴幸	大阪体育大学	西日本学生選手権大会
CP	所努	早稲田大学	全日本学生選手権大会	CP	北田忍	大阪体育大学	西日本学生選手権大会
CP	植松伸之助	順天堂大学	全日本学生選手権大会	CP	土坂士朗	大阪経済大学	西日本学生選手権大会
CP	白根和樹	福岡大学	全日本学生選手権大会	CP	山端千治	大阪経済大学	西日本学生選手権大会
CP	佐々木教裕	日本体育大学	全日本学生選手権特別賞	CP	深谷健也	東和大学	西日本学生選手権大会
CP	栃谷則史	早稲田大学	全日本学生選手権特別賞	CP	石川浩之	函館大学	北海道学生連盟推薦
GK	田村健治	国士舘大学	東日本学生選手権大会	CP	阿部素郎	仙台大学	東北学生連盟推薦
GK	吉井丈晴	日本大学	東日本学生選手権大会	CP	小島岳	金沢工業大学	北信越学生連盟推薦
CP	谷嘉徳	国士舘大学	東日本学生選手権大会	CP	村中泰行	中部大学	東海学生連盟推薦
CP	岩本裕	国士舘大学	東日本学生選手権大会	CP	松本勝哉	広島大学	中四国学生連盟推薦

女子

	氏名	所属大学	選考対象		氏名	所属大学	選考対象
GK	二井田朗子	東京女子体大	全日本学生選手選手権大会他	CP	佐々木史子	筑波大学	東日本学生選手権大会
CP	児島愛	東京女子体大	全日本学生選手選手権大会他	CP	當山祐子	大阪体育大学	西日本学生選手権大会
CP	山口美穂	東京女子体大	全日本学生選手選手権大会他	CP	橋本ひとみ	大阪体育大学	西日本学生選手権大会
CP	日下部美智	筑波大学	全日本学生選手選手権大会他	CP	三輪田裕美	武庫川女子大	西日本学生選手権大会
CP	早川まさみ	筑波大学	全日本学生選手選手権大会他	CP	広瀬輝美	福岡大学	西日本学生選手権大会
CP	田中絹江	大阪体育大学	全日本学生選手選手権大会	CP	影山里子	中京女子大学	西日本学生選手権大会
CP	大石真代	武庫川女子大	全日本学生選手選手権大会他	CP	長岡美香	北海道女子大	北海道学生連盟推薦
CP	山田永子	筑波大学	全日本学生選手選手権特別賞	CP	石川和美	東北福祉大学	東北学生連盟推薦
GK	田中麻美	大阪体育大学	全日本学生選手選手権特別他	CP	倉橋良江	仁愛女子短大	北信越学生連盟推薦
CP	田口順子	日本体育大学	全日本学生選手選手権特別他	CP	宮内悠紀	岡山県立大学	中四国学生連盟推薦

※平成10年1月31日全日本学生連盟第2会総合役員会議において平成9年度優秀選手を選考し発表した。

「21世紀にらんだ新鮮事業を」

企画・広報委員
早川　文司

フリースロー
Free Throw

日本協会が60周年。人間でいえばめでたく"還暦"を迎えたわけだ。創草期、戦中、戦後大きく様変わりする世相を乗り越えられたのも、多くの先輩諸氏の労苦と情熱があったからにほかならない。しかし、感傷に浸るのは、昨年国内を沸かせた「クマモト」で終止符を打ちたい。

というのは、今、スポーツ界はものすごいスピードで変革の時代を迎えているからだ。各競技団体はこうした時流に乗り遅れまいと21世紀をにらんだ事業をいろいろと模索している。ハンドボール協会としても、この流れを黙って見ているわけにはいくまい。指を食わえていたのでは、何事も始まらない。積極的にアピールしてこそ、存在感も見直されると思う。

あっとファンを、世間をうならせる新事業やアイデアを総力を結集して練り上げ、21世紀へのレールを敷くことしかあるまい。それも「もうかる協会」への脱皮をねらったものにしたい。

景気の低迷が続く中、広告集めにも限界があるし、これまでのように企業に"オンブにダッコ"スタイルがいつまでも続くとは限らない。現にトップレベルにあった大手スーパーの陸上、バレーボール部が活動停止に追い込まれた。厳しい環境を生き抜くためには、しっかりした財政的な後ろ盾が必要である。そのためには「もうかる協会」「もうける協会」をにらんだ事業展開がなんとしても大切だ。

とにかく入場料収入が見込める観客を増やすことが肝心である。その手段はいろいろあろう。魅力ある戦い、感動を呼ぶ試合…。だが、それもコートに足を運んでこそ実感できることで、スケジュールを知らなければ無理な話。積極的なＰＲ活動も必要だし、地域に密着した愛される チームづくりの推進へ草の根運動が欠かせない。

各地で"ハンドボール祭り"などを開くのもいいだろう。とにかくハンドボールという競技を知らせることである。そして"ハンドボール文化"を創造する画期的な催しをひねりだすことだ。

幸い協会創立60周年と区切りのいい年だ。21世紀へつながる新鮮な一大記念事業を考案して、多くのファンの目をくぎづけにしたいと願っている。

最後の全日本総合
―地方から全日本総合を目指して―

日本ハンドボール協会A級審判員　森山　正治（福岡）

第49回全日本総合ハンドボール選手権大会を最後に、全国大会のレフェリー引退となる。ハンドボールのレフェリーに関わり、日本で一番大きな大会である全日本総合で引退試合を迎えることができ、これほどの幸せはなかった。

出会いそして交流

最初に赴任した福岡高校で、中西敬一先生（前全国高等学校体育連盟部長）に出会ったことがハンドボールとの出会いとなる（それまでは、駅伝が主で、大濠高校では主将を努め全国制覇、順天堂大学では箱根駅伝に出場）。平成2年福岡とびうめ国体を契機に大塚文雄全日本審判長、国際レフェリー岡本・清水ペア、宮崎インターハイで、北岡大覚全国高体連審判長、浜田・小笠原ペアとの交流ができ（また、この時にベストペア新荘悌男氏那珂川中教諭と出会う）、先生方の経験談を聞かして頂くことが地方にいる者にとっては、大変貴重なことであり、また、より良いレフェリーを目指す意欲を駆り立てるエネルギーとなった。

福岡国体との出会い（ルールとは）

昭和57年より県審判長となり国体（平成2年開催）に向けて審判部の取り組みを行なう。その一つにルール研を作り研修会を行ない、バスケットボールやラグビーなど、他の競技のルールを研修する中で以下のことが確認できた。

（1）ルールの三原則（全く異なるスポーツでも基本的な考え方は共通している）

「安全」　危険性がなく安心してプレーができる。

プレーヤーの技能が十二分に発揮できるよう。

「平等」　同じ条件の中で競技する。

反則を侵した者が、有利にならないように、アドバンテージルールは、広い意味での平等である。

「尊敬」（フェアプレー）ルールと相手選手と審判を尊重する。

ハンドボール競技を通して、人間が育つかどうかは、ここにかかっていると思われる。

（2）ハンドボール競技の基本的考え方最もスピーディーなスポーツである。

〃より速く〃

ハンドボールの特色である〃スピーディーさ〃を表現するものそれがアドバンテージである。また、ハンドボール競技はアドバンテージルールによって表現されると言っても、過言ではない。

ハンドボール競技のレフェリーは、ルールに精通し、確固たるハンドボール観（理念）を持ってレフェリングにあたることが大切となる。なぜなら、ハンドボールという競技は、他の競技と比較しレフェリーに任せられていることが多い。例えば、ゴール前でのシュートをDFが阻止し笛がなる。サッカーであれば自動的にPKであるが、ハンドボールはフリースローか、7mスローか、警告退場の段階的罰則を用いるかは、すべてレフェリーに委ねられることになる。

（3）レフェリーとしての姿勢

昭和62年第11回全国高校選抜大会（名古屋）に、後藤・島田ペア（国際レフェリー）が参加されたときのことである。他の試合の判定をスタンドからトランシーバーにて確認されたり、自分達の審判をVTRに撮り、夜ホテルの自室にて研修されているのを眼にし、コート外に於いても研鑽を積まれている姿に心打たれた。この時、レフェリーとしての姿勢を教えられた気がする。

レフェリーに長く関わるためには、トレーニングを怠らないこと。プレーヤーや指導者は、毎日激しいトレーニングを積み重ねている。それに対してレフェリーも毎日のトレーニングが課せられている。私も、自分に対し毎日のランニングやテニス・水泳等を行なってきたことが最後まで続けられた原因である。（恐いのはレフェリーを引退してからの生活である。今までの、健康管理を続けていけるかどうか。）

それに、同じ球技のラグビー、バスケットボール、サッカー等の大会やTVを通してトップレフェリーの位置取りや、笛のタイミングを観察すること。

（4）審判上達のために

①判定の上達について

―同じミスを繰り返さない―

・ルールブックを読み、読み方の工夫を。

・いろんなレベルのゲームを観察。

・創意工夫する。（レフェリングの分析に結びつく）

・レフェリーペアのチームワーク。

②表現の上達について

―自信に結びつく―

・方向指示→ジェスチャーを大きくゆっくりと。

・笛の強弱、長短の変化をつけて。

・間の取り方、コールに節をつける。

・簡単なことを正確に、キビキビと。

（5）より良いレフェリーになるために

①プレーヤーの立場に立って。

「信頼される審判になる」

②観衆の立場に立って。

「表現力が豊かになる」

③運営する立場（協会）に立って。

「自己認識ができるようになる」

④若き審判員のために

―自信をもて！―

・失敗は、成功につなげる「経験」である。

・進歩は反省の厳しさに比例する。

・伸びている時は、必ず抵抗がある。

最後に―「One for all, all for one」

熊本世界選手権大会にてオフィシャルをする機会に恵まれ、その中で、スタインバッハ氏（IHF審判長）等のスーパーアドバイザーとの交流ができた。競技が開催される前には、私達にも必ず握手をなされたのには感動した。また、スーパーアドバイザーがベンチ管理をされ、レフェリーがゲームに集中できる環境作りに努力されたり、試合中レフェリーがオフィシャル席に眼をやると、「うなずく」ジェスチャーを送り「安心感と勇気」を与えられた姿が大変印象的であった。思いやりと、優しさを兼ね備えた、何と心豊かな人達であろう、オフィシャルをする中で多くのことを学び得た気がする。

第49回全日本総合にて最後の笛を吹く中で、大会に関わっておられた方々の心の温もりと、暖かさを体験させられた。私事でありながら試合終了後においては、セレモニーをして頂き、日本協会をはじめ審判団の方々から記念品を頂き、また、ナショナル監督の蒲生晴明氏や、福岡出身の林選手（大同）・横尾選手（大崎）・坪根選手（湧永）から、慰労のことばを頂きこれほどの感激はなかった。感謝の気持ちで一杯です。

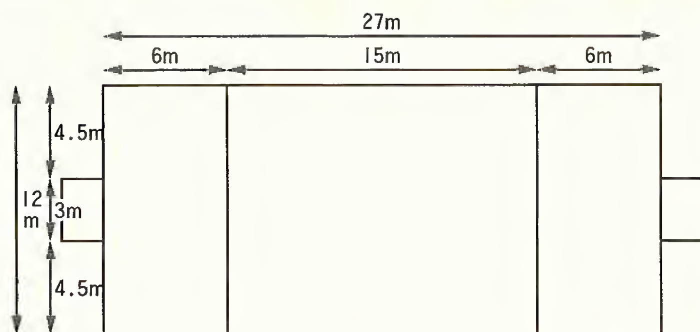
これからは、若いレフェリーの先生方に私の経験が何かお役に立てればと思っております。

最後になりましたが、日本協会をはじめ、審判員・大会役員の方々それに、厳しい指導をして頂いた九州協会審判長福田英明氏に感謝しお礼の言葉とさせて頂きます。

ビーチ・ハンドボール競技規則

1996年に合衆国で開催された、IHF総会の機会に発表された、ビーチ・ハンドボールの競技規則を、国際ハンドボール連盟は、ヨーロッパ・ハンドボール連盟と協力して改訂した。改訂された競技規則は、実際的な運用を試すために、全世界で使用されている。6ケ月間のテスト期間の後で、IHFの会議は、1998年開始のビーチ・ハンドボールのための競技規則の公式の条文を決定する。以下の文章において、現時点で、妥当な競技規則を検討してほしい。1993年8月1日から続いているIHF競技規則に、1997年8月1日に実施するため、IHFの会議によって、既に変更済のものを加えて、ビーチ・ハンドボール規則の基本的な部分を構成する。必要な説明は、以下の競技規則にある。

図1



■第1条　競技場

▼1の1

競技場（図1）は、1つのプレイイング・エリアと2つのゴールエリアを含む、長さ27ｍ、巾12ｍの長方形である。競技場の表面は、深さ40ｍ以上の砂の層でなければならない。

▼1の2

競技場の長い側を、サイドラインと呼び、短い側を、アウター・ゴールラインと呼ぶ。巾3ｍ、高さ2ｍのゴールをアウター・ゴールラインの中央に立てる。ゴールポストの間のラインをゴールラインと呼び、単に砂の上に引く。

▼1の3

ゴールエリアは、アウター・ゴールラインから6ｍの、平行なラインを引くことで、区別する（1の4参照）。

▼1の4

プレイイング・エリアは、長さ15ｍ、巾12ｍである。ラインは、巾8㎝で、伸縮性がなければならない。異なる色の15ｍの長さのラインを使って、サイドライン上に、プレイイング・エリアの半分を示す。

■第2条　競技時間

▼2の1

競技は、得点上独立した、2つのハーフから成り立つ。各々のハーフは、10分間とする。ハーフの間の休憩は、5分とする。

▼2の2

競技は、前・後半を、レフェリー・スロー（第10条・第15条）で始める。トスはエンドを決定するために行う。もう一方のチームが、交代地域のためのサイドラインを決定する。ハーフタイム間の休憩後にサイドと交代地域を交換する。

▼2の3

各々のチームは、各々のハーフで、1回のタイム・アウト（1分間）を申請することができる。

▼2の4

ハーフ終了時に得点が同じ場合は、サドン・デスを行う。レフェリー・スロー（第5条）で、競技を再開し、最初のゴールで、勝者を決定する。勝者は、1ポイントを与えられる。

▼2の5

両ハーフとも、同じチームが勝ったならば、そのときは、このチームが2−0で勝つ。

▼2の6

後半で、もう一方のチームが勝ったならば、結果は、1−1の引き分けである。勝者を決定しなければならないときには、「コートプレイヤーとゴールキーパーの1対1」を行う（第9条）。

■第3条　ボール

▼3の1

競技は、円形で滑り難い、ゴム製のボール、男子の試合では、重さ約360ｇ、直径17・5㎝、女子の試合では、重さ約290ｇ、直径約16・5㎝で行う。子供の試合のためには、より小さいボールを使用しても構わない。

▼3の2

各々の試合の前には、規定のボールを、少なくとも3個用意しなければならない。できるだけ競技が中断するのを防ぐために、レフェリーは、常に予備のボールを持ち運ぶ。

■第4条　チーム

▼4の1

原則として、競技開始時に、チームは、多くとも8名、少なくとも6名のプレイヤーが、居なければならない。もし、チームのプレイヤーの数が4名未満になったならば、競技は終了し、そのチームが敗者となる。

▼4の2

最大4名のプレイヤー（3名のコートプレイヤーと1名のゴールキーパー）が、同時に、競技に出場することができる。残りのプレイヤーは、交代プレイヤーである。原則として、プレイイング・エリアの片方のサイドライン全体の外側で、座っていなければならない。

▼4の3

不正交代によって、競技を中断しなければならなかったときには、相手チームのフリースロー（第13条）か6ｍスロー（第14条）によって、競技を続行する。そうでなければ、状況によって、中断の理由に相応しいスローによって、競技を再開するべきである。不正交代したプレイヤーは、一時的に退場となる（第17条）。

▼4の4

全てのプレイヤーは、裸足で競技を行う。チームが同意し、全てのプレイヤーが履く場合のみ、履物が許される。これは、IHF競技規則18の3に従って、レフェリーによって決定される。

■第5条　ゴールキーパー

▼5の1

ボールを所持していないとき、ゴールキーパーは、ゴール・エリアから出て、チームと一緒に、プレイング・エリアでプレイすることが許される。

▼5の2

ゴールキーパーがコートプレイヤーとして得点した場合は、この得点には、付加価値が付けられる（競技規則9の1）。

▼5の3

得点の後、ゴール・エリアからの、ゴールキーパーのスローアウトによって、競技は続行される（第10条）。

■第6条　ゴールエリア

▼6の1

ボールは、たとえ、ゴール・エリアで、静止していても、転がっていても、いつも、プレイすることができる。しかしながら、コートプレイヤーは、ボールをプレイするために、ゴール・エリアに入ることを、許されない（フリースロー）。

■第7条　ボールの扱い

▼7の1

静止したり、転がっている、ボールに飛び込むことは許される。

▼7の2

ボールを3秒以上、地面にとどまらせることはできない。それから、最後にボールに触れたプレイヤーが、再び拾い上げることもできない（フリースロー）。

■第8条　相手に対する動作

▼8の1

ここでは、IHF競技規則第8条が、そのまま適応される。しかし、プレイヤー個人に対する罰則は、防御側チームの人数が減らされるだけで済む。競技の連続性に変化はない。

■第9条　得点

▼9の1

ボールが完全にゴールラインを横切ったときに、得点となる。スカイプレイ（前もって空中にあるボールを、地面から離れてシュートするか、空中でボールをキャッチして、そのまま着地する前にシュートするプレイ）での得点は、2倍にカウントする。ゴールキーパーがプレイイング・エリアから得点した場合は、付加価値を加えてカウントする。6mスローも、2倍にカウントする。

▼9の2

両チームが、前後半でひとつずつ勝った場合は（1－1）、それぞれのチームが指名した、5名のプレイヤーが、相手チームと交互に、「コートプレイヤーとゴールキーパーの1対1」を行う。ゴールキーパーが、5名の1人に指名された場合は、コートプレイヤーとして数えられ、他のプレイヤーが代わりにゴールキーパーを務めなければならない。5回の対戦の後で、より多くの得点を上げたチームの勝ちである。「コートプレイヤーとゴールキーパーの1対1」は、両チームのゴールキーパーが、自分のゴールラインに立つことで始まる。1人目のプレイヤーが、自陣のゴールライン側のプレイイング・エリアの2つのコーナーの1つに立って、最初の最初の対戦が始まる。レフェリーが笛を吹き、プレイヤーが味方のゴールキーパーにボールを戻す。一度、ボールがスロアーの手から離れると、両方のゴールキーパーは前方へ進むことができる。ボールを得たゴールキーパーは、相手のゴールにシュートするか、走っている味方のプレイヤーにパスをするか、3秒以内に投げなければならない。後者の場合は、直接ボールを受け（捕る前に地面に落とすことはできない）、シュートを試みなければならない。コートプレイヤーによって投げられたボールは、地面に触れても構わない。ゴールキーパーは、ボールを投げ終わるまで、ゴールエリアから離れてはならない。ゴールキーパーが直接シュートを決めて得点した場合は、得点を2倍にカウントする。防御側のゴールキーパーは、いつでも、ボールを持っていなければ、自分のゴールエリアに戻ることができる。

▼9の3

「コートプレイヤーとゴールキーパーの1対1」において、防御側のゴールキーパーが、規則違反によって得点を防いだならば、6mスローが与えられる。このスローによって得点が、入った場合は、2倍にカウントする。レフェリーが、ゴールキーパーの行為を、重大な規則違反と解釈し、段階的に罰しなければならないと判断した場合には、得点を3倍にカウントする。

▼9の4

最初の対戦の後で、決着がつかなければ、他の5名の中から、2番目の対戦に出場するプレイヤーが指名され、「コートプレイヤーとゴールキーパーの1対1」は、続けられる。これ以降の対戦において、両チーム1回ずつの試みの後で、一方のチームが1つのゴールによって勝っているならば、決着することになる。

▼9の5

プレイヤーの数が5名未満の場合でも、一人のプレイヤーが2度試みることはできない。そのチームは、人数が不足する分、試みる機会が少なくなるだけである。

▼9の6

「コートプレイヤーとゴールキーパーの1対1」の間、出場する全てのコートプレイヤーは、最初の対戦が始まるゴールの後で、待機しなければならない。対戦が終わったプレイヤーは、もう一方のゴールの後へ移動する。

■第10条　スローオフ

▼10の1

基本的にはゴール・エリアからスロー・アウトの形式を取るが、前・後半の始まりは、レフェリー・スロー（第15条）で開始する。

▼10の2

得点が入ったときには常に、ゴールキーパーが自陣のゴール・エリアからボールをスロー・アウトすることによって、競技は再開される。

▼10の3

コートプレイヤーは、プレイイング・エリアのどこに居ても構わない。

■**第11条　スローイン**

▼11の1

IHF競技規則11の1が、そのまま適用される。

▼11の2

スローインのポイントが、ゴール・エリア・ラインの内側の場合は、このスローインで、直接ゴールを狙うことはできない（スローアウト）。

■**第12条　スロー・アウト**

▼12の1

IHF競技規則第12条が、ほぼそのまま適用される。

■**第13条　フリースロー**

▼13の1

規則違反が起こったら、相手チームにフリースローが与えられる（IHF競技規則第13条と同じ）。

▼13の2

原則として、フリースローは、違反が起こった地点から行われなければならない。

▼13の3

フリースローが行われるとき、攻撃側のチームのプレイヤーは、ゴール・エリア・ラインから1m以上離れなければならない。

▼13の4

相手チームのプレイヤーは、スロアーから少なくとも1m以上離れなければならない。しかし、ゴール・エリア・ラインに沿って立つことは許される。

■**第14条　6mスロー**

▼14の1

IHF競技規則第14条（7mスロー）がそのまま、変更することなく適用される。6mスローに、罰則が付けられたときには、得点は、常に少なくとも2倍に、カウントされる。

▼14の2

6mスローの際、ボールが手から離れる前に、スロアーは、ゴール・エリア・ラインに触れても、越えてもならない(フリースロー)。

▼14の3

相手チームのゴールキーパーと他のプレイヤーは、スローを行うプレイヤーの1m以内に近づいてはならない。

■**第15条　レフェリー・スロー**

▼15の1

IHF競技規則第15条が、変更することなく適用される。しかしながら、最初の区切り後で同点の場合のサドン・デス同様、競技の前・後半は、レフェリー・スローで始める。

▼15の2

コート・レフェリーが笛を吹き、プレイイング・エリアの中央で、ボールを垂直に投げ上げる。もう一人のレフェリーは、オフィシャルの反対側のサイドラインの外側に立つ。

■**第16条　スローの実施**

▼16の1

IHF競技規則第16条が、変更することなく適用される。

■**第17条　罰則**

▼17の1

IHF競技規則17の3の最後の段落によって、退場に値する、規則違反やスポーツマンシップに反する行為を行ったプレイヤーは、退場となるが、時間の制限はない。これは、いかなる退場にも適用される。

▼17の2

失格（IHF競技規則17の5）や追放（IHF競技規則17の7）となったプレイヤーやチーム役員はもはや競技に関与することはできない。しかしながら、退場のプレイヤーは、チームがボールの所有を得たとき、競技場に戻ることができる。

▼17の3

罰則が、6mスローによって再開されるときには、得点は、常に少なくとも2倍にカウントされる（9の1、9の3、14の1）。

■**第18条　レフェリー**

▼18の1

IHF競技規則第18条がそのまま、変更することなく適用される。

ジェスチャー

▼1

IHFジェスチャー1から11と13と16から18は、変更することなく適用される。

▼2

ジェスチャー12は、類似したものが用意された。得点が2倍・3倍にカウントされるときには、レフェリーは、2本か3本の指を出すことで、これを示さなければならない。

▼3

ジェスチャー14から15は、変更された。レフェリーは、規則違反を示し、違反したプレイヤーを指す。親指を下に向けて片腕を広げれば、競技規則17の1による、退場を示し、親指を下に向けて両腕を広げれば、競技規則17の2による、失格を示す。

交代地域

▼1

交代地域規定は、そのまま、変更することなく適用される。

▼2

両チームは、サイドラインの外側に居ることになり、競技場の片側の全体を、交代地域として使うことができる。その結果、競技場の各々のサイドラインの外側は、1つのチームだけで、占められることになる。ゴールキーパーも、この交代地域側だけに、競技場からの出入場が許される。

IHFニュース

●男子世界選手権新日程

男子世界選手権は、2001年より通常1月後半から2月の最初の週末にかけて開催されることが、IHF評議会で採決された。

●1999年女子ジュニア世界選手権

IHF評議会は1999年女子ジュニア世界選手権開催を中国に決定した。広東省の広州土近隣の都市で8月1日から15日にかけて行われる。

●ジュニア選手権のための新しい世界選手権要項

次回の男子・女子ジュニア世界選手権は、IHF評議会によって採択された新しい試合要綱によって行われる。現行の規定では、ベストエイトに残らなかったチームは大会終了前に出国しなければならなかったが、新しい要項ではすべてのチームが選手権終了まで留まることが決められている。これによって、すべてのチームが同じ日に到着、出発すること、選手権の順位がすべて試合によって決められること、そして下位チームのための無理のない試合数の増大などがメリットとなる。1999年の中国とカタールでの大会から採用される。

●3チームが出場取り消し

次回の女子ジュニア世界選手権に、アルゼンチン、ベラルーシ、ウクライナの3カ国が出場を取り消された。これらの3カ国は、前回の大会でドローの後棄権をしたため、IHF規程に基づいて出場取り消しとなった。

●オーストラリア不戦勝

オーストラリア男女ナショナルチームは、自動的に1999年世界選手権の出場権を得た。この決定は、シドニーオリンピックを視野に入れたオーストラリアの準備をさらに発展させることを可能にした。男女ジュニアチームは通常通り予選を戦わなければならない。

●シドニーオリンピック、ハンドボールは連日競技

シドニーオリンピック委員会は、シドニーオリンピック大会ハンドボール競技の日程を制定した。この草案では、大会中1日を除いて毎日試合が行われる日程となった。

IHFは9月17日から27日まで、男女交互に試合を行うことを計画している。9月29日から10月1日にかけて準決勝・決勝が行われる。男子決勝は土曜日に、女子決勝は最終日に設定されている。

●ワールドゲームズでビーチハンドボール

国際ワールドゲームズ協会(IWGA)は、IHFをIWGAの正規会員として認めた。このことにより、2001年秋田でのワールドゲームズで、ビーチハンドボールを実施する望みが出来た。最終決議は、1998年春に開催者のプログラム委員会で取り上げられる。IHFの提案が採択されれば、最初のビーチハンドボール世界選手権が実施される機会となる。

●1997年女子世界選手権レフェリーの変更

健康上、職業上、政治的理由により、スウェーデン、オランダ、コンゴのレフェリーは、ギリシャ、スイス、アルジェリアのレフェリーに変更される。

●仮チーム登録

1997年女子世界選手権開催国及びIHFは、10月30日が期限である仮チーム登録を受け付けている。世界選手権の規則により、変更・追加は大会前のテクニカル会議の1時間前まで可能である。

●19カ国でテレビ放映

ドイツでの女子世界選手権の放映権は、19カ国が取得した。これは前回大会を放映したテレビ局数を上回るものである。前回は、13カ国182局が放映権を取得し、放映時間は134時間におよび、7600万人以上が視聴した。

トピックス

ワールドハンドボールマガジンで橋本選手が特集される

「ワールドハンドボールマガジン」で日本のGK・橋本行弘選手が特集された。



その記事を以下に紹介しよう。

熊本での世界選手権大会以前は、自国の日本で、160回もの国際試合においてすでにナショナルチームの勝利を収めていたとしても、橋本行弘選手は世界的に、全く無名の選手であった。しかし、日本の南部地方で行われた世界選手権大会以降は、Perunicic, Grimson, Richardson の様な選手を含み、全てのハンドボール選手達にとって今や日本のゴールキーパーを知らない者はいない。日本のフォーミュラ1の町鈴鹿から出た31歳の速やかな反射神経を打ち負かすのは、非常に困難なものであった。橋本は大会期間中、観客の心をつかんだだけでなく、世界の精粋としてのランクにフォーミュラ1のごとく飛び込んできたのだ。ゴールキーパーの伝説的人物 Mats Olsson (SWE) や Andrej Lavrov (RUS) と共に、橋本は世界選手権大会でひときわ目立つ存在であった。その事実は、身長1m86cmの日本の選手が見せる別格のパフォーマンスが記録された大会統計によっても実証された。橋本は、36%の率でゴールを守った。特に、ウイングショット（50%）や、ペナルティースロー（45%）に関しては、著しい力を見せた。

日本ナショナルチームのゴールを今や10年近くもの間守り続けてきた橋本は、2名のスウェーデン人と共に、近年最大の成長を遂げた。日本のゴールキーパーのスタイルに、スウェーデン、クロアチアの要素を混合すべきであると橋本に確信させたのだ、とオーレ・オルソン監督は説明し、次のように語った。「日本のキーパー達は、ヨーロッパの選手のように、多くは動きまわらない。これが、我々によりやる気をなくさせ、また攻撃意欲を欠くのである。ですから、結果的に私は自分の方針を変えたのである。」

同様に、Mats Olsson はスウェーデンにて行われたトレーニングセッションに参加した際、橋本選手に多くの助言を与えた。それは特に、プレーヤーのショットに対する分析法についてであり、実際に役立つものであった。「その助言はまた、熊本での世界選手権大会の際、私にとって多大な手助けとなりました。」と橋本は語る。

これら全ての結果が、日本のゴールラインにおいて、最高点を極めた男とさせたのだ。ボールは既にゴールネットに入ったかと、だれもが感じたその瞬間、目を見張るダイブで飛びつき、ゴールコーナーのボールを打ち返したのだ。それは、まるでサッカーのゴールキーパーを暗示させるような、いや、それ以上のすばらしいものであった。

まさに、強壮な予測できないゴールキーパーに感謝したいものだ。

日本ではいつものことだが、橋本は16歳の時に高校でハンドボールを始めた。彼は現在、日本の第一級チームである本田鈴鹿チームでプレイしています。日本車製造社でスプレーヤーとして勤務、セミプロのチームでハンドボールをしている。このことは、彼が8時間の勤務のあとで、トレーニングを開始していることを意味している。家族と共に少ないフリータイムを過ごすことを楽しんでいる橋本は、他のハンドボール選手同様ヨーロッパでプレイしたいと願っている。しかし、この件に関してはこれまで、我々にとって有利な申し出がなかった。ヨーロッパでも、充分に際立つゴールキーパーが現れたのだとしたら。橋本行弘の世界的キャリアは、日本の悪条件に終止符をうち、ヨーロッパへの第一歩となるのかも知れない。橋本選手は、ハンドボールを辞めることなど全く考えていない。「私のフォームが良いものであり、コーチが自分を必要としている限りプレイし続けるつもりだ。」と彼は語った。

ヘッドレフェリーシンポジューム報告

シュタインバッハ
（オーストリア）

審判委員会副委員長　斉藤　実

期間　1997 6.13〜6.19
基調講演

◎Control(reduce) the number of IHF referees(IHF審判員の数を操作（削減）する)

IHFの審判員の数を削減するということは逆説的にみえるかもしれないが、実際は、現行のIHFの多くの審判員は今まで一度も、これからも絶対にIHFの試合を審判することはないだろう。加えて、IHFのエンブレム（紋章）はステイタスシンボル以外の何物にも考えられていない。

目指すところは（審判の）質であって、量ではない。

◎Financing（財政に関して）

あらゆる事業には多額の費用がかかる。よって、IHFの各委員会は、IHFの一般財政に頼るだけではなく、自らの予算を生み出すことに取り組むことが重要である。PRCは任期終了時には少なくとも50パーセントの予算増を目標としている。

◎Implementation of the new Playing Rules,1997, further development(1997年改正の新ルールの施行並びにその発展的運用)

新ルール（1997年8月1日より実施）は、必ず実行され、世界規模で広められなければならない。皆さんはこのシンポジュームで指導を受け、各国の連盟にその内容を持ち帰るという極めて重要な任務を帯びている。

新ルールの発展的運用は、より魅力的なハンドボールを目指すことに特に重きを置くが、IHFの各委員会によって、全てのIHFメンバーの支援とデータ提供のもとに、継続的に推し進められなければならない。

◎Promote women in refereeing（女性審判員の促進（昇進））

ワールドカップ（WC's）の審判員任命（推薦）において、女性審判員の促進（昇進）をPRCは考慮する。しかし、主導権を取るのは各大陸（の連盟）でなければならない。

◎Referees observation（審判員の観察（評価））

新しい審判観察（評価）用紙が作られたが、EHFによって使われているものと似ているものである。そして、PRCは審判員の任命（推薦）の元になるものとして、より実践的な観察（評価）を用いることを目指している。

競技規則の解釈について

日本ハンドボール協会審判委員会

競技規則の解釈

1。タイムアウト（2の4）を次のように変える。

タイムアウト中の違反は、競技時間中の違反と同じに扱う。

競技時間が中断されるとき。

次の場合は、必ず、タイムアウトをとらなければならない。

(a)レフェリースローを判定したとき。

(b)失格や追放したとき。

(c)タイムキーパー、または、IHFや大陸連盟のTD(Technical Dalegate =以下省略)ナンバーから合図があったとき。

(d)チームアウトのとき。

(e)7mスローの判定をしたとき。

原則として、次の場合は、タイムアウトをとる。

(f)異常事態がおきたとき。

(g)協議が必要なとき。

(h)負傷が考えられるとき。

(i)退場時間中に、同チームのプレーヤーを退場させるとき。

(j)ゴールキーパーの交代や、各種スローの実施時などに、遅延行為が行われたとき。

(k)ボールがコート外に出て、レフェリーから見えなくなったとき。

次の場合は必要に応じてとる。

(l)警告、退場のとき。

(m)不正交代や不正入場のとき。

(n)プレイヤーが、ボールを遠くに投げてしまったり、渡さないとき。

新競技規則解釈2

2。チームタイムアウト（作戦タイム）(2の4)

各チームは、正規の競技時間(延長時間を除く)の前、後半にそれぞれ1回ずつ、1分間のチームタイムアウトを請求する権利がある。チームタイムアウト請求カードは、緑色であることが望ましい。一度請求したチームタイムアウトは、取り消すことができない。

チーム役員が、タイムキーパーにチームタイムアウトを請求したときは、次の状況でチームタイムアウトが与えられる。

・ボールが、チームタイムアウトを請求したチームのゴールに入ったとき（得点されたとき）。

・ボールが、チームタイムアウトを請求したチームのアウターゴールラインを越えたとき（ゴールキーパースローのとき）。

タイムキーパーは、笛を吹き、伸ばした腕で、請求したチームを示し、チームタイムアウトであることを知らせる。緑色のチームタイムアウト請求カード（15×21cmの長方形）は、チームタイムアウトを請求したチーム側の机上に立てておく。

スローオフやゴールキーパースローが、既に行われたならば、チームタイムアウトを与えてはならない。

コートレフェリーが、タイムアウトの合図を出し、そして、タイムキーパーが時計を止める。レフェリーが、チームタイムアウトを認めたときには、ジェスチャー18（チームタイムアウト中のコート内への立ち入りの許可）を行う。このときに、タイムキーパーは、専用の時計で、チームタイムアウトを計時し、その管理を行う。スコアラーは、チームタイムアウトを請求したチームを、記録用紙に記入する。

チームタイムアウト中、プレイヤーとチーム役員は、コート内、外を問わず、自陣の交代地域の前にいなければならない。レフェリーは、ボールを持ってコートの中央で待機し、必要なら、そのうち一人が、協議の為に、速やかにオフィシャル席に行く。

チームタイムアウト中の競技規則違反は、競技時間中の違反と同様に扱う（解釈1）。違反したプレイヤーがコート内にいても、交代地域にいても、スポーツマンシップに反する行為は、17の3c、または17の3の最終段階を適用し、退場とすることができる。

50秒経過した時にタイムキーパーは笛を吹き、10秒後に、スローオフか、ゴールキーパースローで、競技を再開しなければならないことを知らせる（16の3a）。

レフェリーの笛の合図で、タイムキーパーは時計をスタートさせ

る。

オリンピックにおいて、チームタイムアウトが請求されるときの一連の流れを、20項目にわたり補足説明をした手引きが用意された。オリンピックや世界選手権のような重要なイベントにおいて、タイムアウトを請求するときに、カードを使うことが有効であると証明された。このグリーンカード（アトランタオリンピックで使用）は、「チームタイムアウト」を請求した側のオフィシャルテーブルの上の前方に掲示された。これはマスコミにとって、「ハイライト」やコマーシャルを準備する良い機会となった。カードは、各々のハーフの終了後に回収され、予備のカードも役に立った。

チームタイムアウトの請求についての20項目の手引きが、チームタイムアウトのルールを正しく運用する手助けとなった。

競技規則の解釈について

競技規則解釈2～5は、競技規則3～6に変わる。

新競技規則解釈7

7。パッシブプレイの予告ジェスチャー（7の10）

コートレフェリーが、パッシブプレイと判断したときは、手を上げて（ジェスチャー19）、シュートをする意図が認められないことを知らせる。ゴールレフェリーも、同じジェスチャーで同意したことを示す。その後も、攻撃側チームが、引き続きゴールにシュートを打とうとしなければ、原則として、コートレフェリーが、パッシブプレイの笛を吹く。

1度出された予告ジェスチャーは、攻撃側がボールを失って、攻撃を終えるまで有効である。攻撃側にフリースローが与えられた後でも、パッシブプレイが認められるときには、ジェスチャーを繰り返すことなく、判定すべきである。

この予告のジェスチャーによって、チームはレフェリーのパッシブプレイの判断に対応できる。

レフェリーは、次のような明らかな遅延行為に対しては、予告ジェスチャーなしで、パッシブプレイの判定をすることが出来る。

・あまりにもゆっくりとしたプレイヤーの交代。
・他のプレーヤーにパスできるにもかかわらず、自陣にロングパスを戻す。
・明らかなシュートチャンスにシュートをしない。

パッシブプレイの予告ジェスチャーが、レフェリーに大きな問題を引き起こすことは、通常ならばない。熟慮される唯一のことは、予告ジェスチャーを出した後、レフェリーがパッシブプレイの笛を吹くのが、早すぎてならないということである。実際、攻撃側のチームには、組織的に、又、十分に考えられた攻撃をするチャンスが、与えられるべきである。攻撃リズムの変化や、組織的な一連の動きの後で、ゴールにシュートしようとする試みが継続しているかどうかを、はっきりと認識できなければならない。

■フリースローの後

攻撃がフリースローになったならば、攻撃側チームには、ゴールにシュートするための次の攻撃を準備する機会が、もう一度与えられなければならない。詳しくは、あるポジションから他のポジションへのパスによる、組織的な一連の活動（最長のパスで、例えば、左サイドから右サイド）が、認められなければならない。攻撃リズムの明確な変化も、攻撃のプレイがプレッシャーを与えている様子も見られないときは、レフェリーは、いつでも、パッシブプレイの笛を吹くべきである。

■得点の後

攻撃は、ゴールへのスローによって、ひとまず完了している。攻撃側チームが、再びボールを保持したならば、次の攻撃の可能性を準備する機会を、与えなければならない。フリースローの後と同じ方法で、レフェリーは対処する。

■フリースローを誘うとき

得点差や競技時間の終了間際、退場者がいる状況では、チームは積極的に攻撃を仕掛けない。このような攻撃側が、防御側のフリースローを誘おうとする場面では、パッシブプレイの笛が吹かれる前に、しばしば、「オーバーステップ」や「チャージング」によって罰せられることがある。しかし、攻撃側のプレイヤーが、これらの反則のいずれも侵さなかった場合には、フリースローをもらうためには「つかまる」しかない。見せかけの1対1が行われたときには、パッシブプレイの笛を吹く。原因と結果（演技が含まれることもある）を見極めて、パッシブプレイを罰しなければならない。

競技規則解釈6～10は、解釈8～12に変わる。

13。アドバンテージ（13の16、14の10）を次のように変える。

得点により、試合の勝敗が決まる以上、結果的に攻撃側が、不利になるときは、フリースロー（13の6）や7mスロー（14の10）の判定をしてはならない。したがってレフェリーは、有利な状況（人数で勝っている、有利な位置取りにある）かどうかを即座に判断し、シュートができるように待たなければならない。

アドバンテージの精神を優先するためには、待つことが必要である。しかし、シュートの際に、規則違反（例えばオーバーステップやゴールエリアへの侵入）や、レフェリーが早く笛を吹いてしまい、得点にならなかったときは、レフェリーは、フリースローか7mスローの判定をしなければならない。

攻撃側チームにとって、防御側プレイヤーに対する罰則の判定は重要であるが、それは二次的なものなので、罰則は、一連の動作が完了した時点で、判定すべきである。

16。競技の中断（4の5、18の14）を次のように変える。

レフェリーや、IHF、または、大陸連盟のTDが、競技を中断し、プレイヤーや、チームの役員を注意、あるいは、罰則を適用したときには、相手チームのフリースローによって、競技を再開する。フリースローは、違反が行われた地点、もしくは、相手チームにとって有利な地点にボールがある場合は、その地点から行われる。　明

競技規則の解釈について

らかな得点のチャンスに、競技が中断されたならば、7mスローが与えられる。しかし、タイムキーパーが、規則違反のために競技を中断してしまったときには、中断の状況にふさわしいスローで再開される。原則として、タイムキーパーは、競技が中断したときの規則違反に注意を払うだけが責務である。

交代地域規定

1～4までは変更なし。

5を次のように変える。

チーム役員は、競技中も、競技規定に従い、フェアプレイとスポーツマンシップの精神に則り、自チームを指導し、管理する権利と責任を持つ。

原則としてベンチに座っていなければならない。

次のような場合に、チーム役員は、交代地域内で立ち動くことが許される。

・選手交代を管理するとき。
・コートやベンチにいるプレイヤーに作戦の指示をするとき。
・治療行為をするとき。
・チーム責任者が、タイムキーパー、スコアラーと話し合うとき(4の1：例外的にみとめられる)。

原則として、交代地域にいるプレイヤーは、ベンチに座っていなければならない。

プレイヤーは、次のことが許される。

・十分な場所があり、競技の妨げにならないならば、ベンチの後方でボールを使わず、ウォーミングアップすること。

次のことは、許されない。

・レフェリーや、タイムキーパー、スコアラー、プレイヤー、チーム役員、観衆を挑発、抗議、その他のスポーツマンシップに反する方法(言葉、身振り手振り)で、罵ったり、侮辱すること。
・競技に影響を与える目的で、交代地域を離れること。
・ウォーミングアップのとき、サイドラインに沿って、立ったり動いたりすること。

6は変更なし。

交代地域規定に違反したとき、レフェリーは、競技規定17の1d、または、17の5d(警告、失格)に従って罰する。

7を次のように変える。

レフェリーが、交代地域規定の違反に気がつかなかったとき、次の競技の中断時に、タイムキーパー、スコアラーがそれを知らせなければならない。

レフェリーの事実観察による判定をのぞき、その試合を担当するIHF、または、大陸連盟のTDは、起きる可能性のある規則違反や、交代地域規定違反を、次の競技中継時に、レフェリーに指摘することができる。

このような場合には、競技は中継したときの状況にふさわしいスローで再開する。

しかし、IHF、または、大陸連盟が、違反を罰するために、即座に競技を中断する必要があったときには、相手チームのスロー(フリースロー、または、明らかな得点のチャンスのときは7mスロー)で再開する。

レフェリーは、TDと協議した後、交代地域規定違反を犯したプレイヤーやチーム役員を罰し、それを記録用紙に記載する。

8を次のように変える。

レフェリーが、交代地域規定の違反に気付いていながら対処しなかったならば、IHF、または、大陸連盟のTDは、適切な機関(例えば、裁定委員会)に報告書を提出しなければならない。この機関は、交代地域の出来事や、レフェリーの行動について裁定する。

ここでも、よくある光景が公認された。チームの役員が、コーチの目的で、交代地域をより自由に動き回ることが許された。「活動の自由」がコーチに保証された。ハンドボールは生きており、そして、コーチはゲームで生活をしている。コーチが全く冷静で、コート上の動きに感情を示さなかったならば、それは異常である。言うまでもなく、コートに立ち入ることや、レフェリーの判定に対して不平を述べることは、まだ許されてはいない。交代地域でのふるまいに対し、交代地域規定にしたがって、いつ、どのように介入するのかの判断はレフェリーの権限の内で、最も疎遠な部分である。タイムキーパー自身が、競技を中断してはならない。競技の次の中断の機会に、競技違反に対する注意を促すだけである。しかしながら、IHFや大陸連盟の立会人は、競技を中断する権限を持っている。立会人とレフェリーの認識は同等に扱われ、これは競技の続行に関することだけでなく(他のチームのフリースローか7mスローか)、与えねばならない最終的な罰則に関することについても同様である。

誌上講習会

レフェリング事例集

元IHFレクチャー　光島　磯雄

このたび、光島磯雄先生が長年の豊富なレフェリー経験を基に、レフェリングについての事例集を纏められました。編集委員会では、現役のレフェリー、またこれから上級のレフェリーを目指す方々のために、順次掲載をしていきます。

■序論

我が国のハンドボールプレイヤーのルール知識は、多くはプレイヤー自身の直接体験と、コーチからの口伝による教習に止まっているのではないでしょうか。そのためかプレイヤー側の知識は、時として偏ったものであり、極論すれば、不十分であり、ルールに関する頭脳思考をコーチやOBに預けっぱなしにしている感じを否定できません。

ハンドボールやバスケットボールなどでは、コーチの果たす役割が重要なのは勿論ですが、ルール知識の学習理解と、実試合応用という面では、ラグビーのコーチは試合中全く口出しする立場になく、試合は常にチーム全員のルール知識の総和の上に立って、戦われていることに注目すべきでしょう。いいかえれば、ハンドボールプレイヤー側のルール知識吸収消化への関心は、ラグビーに劣ること格段のものがあると言われてもやむを得ないではありませんか。レフェリー側は、定期的に講習会・研修会を開いて一定のレベルを維持しようとしていますが、チーム側では、コーチやトレーナーは、それまでの自チームの勝敗経験や仲間内の見聞情報をもとにして、判断をルールやレフェリングに当てはめることが多いと言えないでしょうか?そしてまたコーチやトレーナーに人を得ないチームは、常にルール知識・レフェリー知識での慢性栄養不良状態を続けるので、試合で不利の事態が自チームにふりかかっても、それに気付かず、あるいは気付いても「おかしいな」と思うだけで、それ以上積極的に対処することをためらう気分・雰囲気もあり、試合に勝てば「まあいいや」となってしまい、敗れれば無益のぼやきの繰り返しとなるだけです。このルール栄養失調状態というべきシンドロームにあるチームを減らすことを目指すシステムの実現が望まれます。

たとえば、各チームはルール・レフェリー研究担当者を必ず配置して、常に新しい正しいルール解釈と公式基準を、正確に伝えるとか、特にチームの直接の利害に関する事例、及びレフェリーのおかす明らかな「誤審」(ルール適用や手続きのミス)とその対処法を、正確に勉強するべきではありませんか。

試合では、いつもベテランレフェリーに吹いてもらえるとは限らないし、レフェリーとて人間である以上、感情の起伏もあり、時には出来不出来もありどんな優秀なレフェリーでもミスをおかすことでは例外ではありません。許されるミス(主に事実判定観察について)と、許されないミス(ルール適用上の誤審誤判)を見わける初歩的判断能力が備われば、ハンドボールプレイへの関心や魅力は、より一層高まるものと信じてよいでしょう。

これらのことを、レフェリーのセンス・プレイヤーの技術・コーチのマナーの向上に役立てることこそ、現在のハンドボールに最も期待されることではないでしょうか?

以下に紹介することは、レフェリーのあら捜しであり、監督コーチの認識不足・プレイヤーの自己中心的ルール解釈行動例の一部です。

よもや、まさか、こんな間違いをするはずはないと思われることまで収録していますが、読んでおいて、知っておいて損にならぬ事ばかりです。

文中頻繁に出て来る数字は、ルール条項の番号なので、今後ハンドボールルール談義の具体的理解と説得力の増進に役立たせるよう、皆様の一層の努力を要望します。

さあ、ひとつ読んでもらいましょうか!

■事例1

【恥ずべき笛・間違った判定と質問提起について】

　ある試合の後半終了間際の出来事。Bチームのプレイヤーが Aチームのゴールエリア前の防御を突破して、シュートした直後にGRは防御側に対人反則があったとして笛を吹いたが、その笛の音から僅かに遅れてボールがゴールに入ってしまったので、このGRは笛の音を継ぎ足してゴールインを認めた。観客の中から「アァッ！やってしまったァ」の声があがった。Aチームのコーチはすぐに事態を理解して、キャプテンを呼び寄せて指示しレフェリーに質問に行かせたが、レフェリーは手を振ってこれを拒否・無視したのでAチーム側はますます興奮し、プレイヤーはスローオフの位置につこうとせず（9：2、18：13第2文）会場は騒然となった。審判長が来てレフェリーを呼び寄せて前後調査した後、裁定を下し、Bチームの得点は取り消しとなり、Aチームのフリースローにより再開となってほどなく試合は終了。延長戦となりAチームはBチームを圧倒して勝ちを得た。Aチームのキャプテンは18：13の終りの文にあるキャプテンの質問権を行使してレフェリーの誤審・誤判定（ピーと吹いてその直後に継ぎ足してピーと吹いてしまったこと）を撤回させた典型的な行為であり、態度が執拗であったとか、コーチのロボットであったとかは問題ではない。レフェリーに責任ある誤判定に気付き、それに対処する知識と勇気を備えていたと評価してよい。レフェリーは、18：13で保障しているキャプテンの権利を認めて耳を貸すべきだったのである。9：2第1文では、次のスローオフの笛が吹かれてしまったならば、得点の取り消しは不可能となることを示している。

　ただし、1997年8月1日からのルール改正では、この質問権は今後チームの責任者によることとなった（18：13第3文）。

■事例2 【誤判定】

　防御側が自己のゴールエリア前でボールを得たが、相手チームプレイヤーに囲まれて進退とパスもできなくなり困って、ボールをゴールエリア内に転がしてしまった。そこでレフェリーは笛を吹き7mスローを攻撃側に与えスローは実施され、続いてスローオフにより試合は再開された。この7mスロー判定は、レフェリーの早合点による誤審であり、防御側がボールを自己のゴールエリア内にほうりこんだだけでは7mスローにならない。GKがそのボールにタッチして初めて成立する（14：1D）ことであり、レフェリーの判定はルールから逸脱したものと言わざるをえない。防御側チームは、コーチもプレイヤーもこのことを知らなかったため、試合は再開されてしまったが、7mスロー判定の条件について知っていたならば、当然質問が出されてもおかしくなかったのである。

■事例3 【誤判定】

　前半終了の直前に、ロングシュートが空間にある時に終了の笛が吹かれたが、その直後にボールは相手のゴールに入り、レフェリーは得点を認める笛を吹いてしまった。試合時間の中断と終了は、その音響信号が鳴り始めたときであり、ボールが空間にあっても中断と終了であり、その後の成り行きは全く無関係である。18：13第2・第3文と4：1第4文によりチーム責任者から質問が出されて、レフェリーは誤審を認め、得点は取り消しとなった。日本国内ではチーム責任者は、所定の標章を付けることが義務となっている。

第５回近畿ジュニア韓国遠征報告

第５回近畿ジュニア韓国遠征が、平成９年12月25日から29日まで、ソウル市富川において行われた。参加スタッフは以下の通り。

団長／福田　隆（富田林高校）、救護／横溝　香（十三病院）

【男子】

監督／工藤昭彦（西宮東高校）、コーチ／前田高志（伊丹西高校）、北川真也（和歌山商業高校）、レフェリー／堀田靖人（東山高校）、翁長　徹（神戸工業高校）、渉外・庶務／位田敏夫（野洲高校）

【女子】

監督／三谷俊二（初芝橋本高校）、コーチ／中村博幸（春日丘高校）、田中　努（育英西高校）、レフェリー／村尾　亮（桜塚高校）、長峰寿次（奈良文化女子短高校）、渉外・庶務／杉尾　哲（西成高校）、竹内　豊（須磨東高校）

【男子・練習試合結果】

◆12月25日(木)
近畿選抜　17－29　富川工業高校

◆12月27日(土)
近畿選抜　26－18　富川工業高校

◆12月28日(日)
近畿選抜　31－32　富川工業高校

【女子・練習試合結果】

◆12月26日(金)
近畿選抜　19－37　黄池女子商業高校

◆12月27日(土)
近畿選抜　16－34　黄池女子商業高校

◆12月27日(土)
近畿選抜　14－42　黄池女子商業高校

◆12月28日(日)
近畿選抜　17－32　黄池女子商業高校

男子監督
（西宮東高校）／工藤昭彦

平成９年12月25日より29日までの５日間、韓国第２位の実力を持つ富川工業高校と合同練習・試合を行った。

今回の遠征の目的は、近畿選抜チームの個々の選手のレベルアップと、選手・コーチ・監督の研修として位置づけ、多くを学びとる意欲を持って臨んだ。

25日、金浦空港到着後すぐに富川工業高校へ案内され、歓迎の式典を開いていただいた。式典には、実業団連盟の会長・黄大燮氏、中高体育連盟会長の権純昌氏、同校校長の金　洛氏等に心あたたまる歓迎を受けた。式典終了後、男子のゲームを一試合行い、結果は17対29と完敗に終った。パスミス、シュートミス等、選抜チームの弱点が多くみられた。しかし、ロング・ミドルシュートが良く決まり、翌日からの練習に期待が持てた。

26日、予定された計画が韓国側との連絡が不十分であり、午前中一試合、午後からは、90分間富川工業高校の金監督の指導を受けるのみに終った。午後からの練習においては、パス練習中心で指導していただき、股下を通すパス練習、スカイプレーを取り入れたコンビネーション等、選手も意欲的に取り組んでいた。

27日、午前中２時間半の合同練習を行った。金監督の指導により、フットワーク・体力作り、一対一～四対四等の内容であり、特にフットワークの練習では厳しく指導していただき、選抜チームの選手も手を抜かず、良く頑張っていた。午後からの試合では、富川工業高校がメンバーを入れかえての試合の為、善戦できた。金監督より、練習・試合を通してオーバーステップが多いという指摘を受けた。

28日、前日同様の合同練習の後、ゲームという予定である。最終戦とあって選手も気合いが入って前半は点の取り合いになったが16対20とよく頑張った。後半途中より韓国側がメンバーを入れかえた為一点差でゲームを終了した。全試合を通して、韓国選手の一対一の能力の高さと、パスの速さ、正確性に感心させられた。また、練習に取り組む姿勢と意欲にも学ぶべき点が多かったと思う。

今回の遠征が、近畿各府県のレベルアップにつながることを期待し、またこのような機会が監督として得られたことを関係各位に感謝致します。

女子監督
（初芝橋本高校）／三谷俊二

平成９年９月に選考会を実施し、その中から素晴らしい選手を21名選出した。全員、意欲満々の生徒達で限られた練習会の中である程度の形を作り、12月25日から29日までの４泊５日間の韓国遠征に挑んだ。

韓国ソウル市に到着、富川（ブギョン）工業高等学校にて開始式に出席し、その後は軽くジョギングを30分行った。男子が富川工業高等学校とゲームをし、それを見学、勝敗はともかくさすが男子のゲーム、スピードとパワーの出し合いだった。見学後、韓国で初めての夕食、生徒達の緊張感も少しは取れたように思えた。その日のうちに全員和気藹々としたムードでホテルに直行。

翌日、生徒達の顔を見ると、また緊張した顔に戻っていた。９時より練習開始、黄池（ファンジ）女子商業高等学校と合同練習、相手チームの監督と話をし、韓国の素晴らしい足さばきとボールコントロールを指導してほしいと要望をかけた。練習前の集合や次のプレーに変わるときなどの機敏な動作、大きな声を出すこと、プレー中のミスに対しては、指導が徹底していた。特に、ミスを犯した者に対しては床に向かってダイビングをさせるなど、罰は厳しかった。練習が始まると、韓国の生徒のフットワークの良さを思いっきり感じさせられた。生徒達も自分の足さばきとは違うことに気が付いたことだろう。ボールコントロールにしてもボールを握り始めた年齢も違う中、近畿選抜の選手達は、一生懸命取り組んでいたと思う。

韓国の生徒達は小学校４年生から実際には８歳からハンドボールを行っており中学・高校・大学と引き続き自分の目標に向かって頑張っている。ここで日本と韓国の何が違うのかということを考えてみた。

今回、韓国遠征に参加して一番感じたことは、日本の教育に対してのシステムと、スポーツに対してのシステムが韓国とは違うということだ。現在の日本の教育はクラブ活動において、あまり力を入れていないように思える。放課後の練習時間の制限や、試験中の練習実施など様々な問題点があるのではないだろうか。最終的には教員・生徒が短時間の練習で、どれだけ集中し熱心に取り組むかが問題ではないだろうか。また、ハンドボールの段階的マニュアルが必要ではないだろうか。

今後、日本のハンドボール界が世界で活躍することを期待し、今回韓国遠征に参加した生徒の中から全日本選手が出てくれればうれしいです。今回の遠征で得たことを大切にし、頑張っていきたいと思います。役員の皆さん、選手の皆さん、ご苦労様でした。

ハンドボールフォトコンテスト要項

1、目的

写真を通して、ハンドボールに親しみ、ハンドボールのすばらしさを表現し、この成果を一般愛好者まで告知をする材料とする。さらに、このコンテストを通して、ハンドボールの愛好者を増やし、文化性を高め、ハンドボールの普及発展に寄与することを目的とする。また優秀作品は、ＩＨＦフォトコンテストに応募の推薦をする場合がある。

2、対象

あらゆるハンドボールに関する写真を対象とし、ハンドボールのすばらしさを表現する写真を選考していく。平成９年度から10年度に撮影された未発表の作品を対象とする。

3、募集

平成10年４月１日より、平成10年10月末日までとする。

㈶日本ハンドボール協会フォトコンテスト実行委員会宛応募すること。

応募に際しては、使用カメラ、撮影条件、撮影場所、撮影対象、題名を明記することとする。作品は、２Ｌ以上のプリントで応募して下さい。

4、審査機関

㈶日本ハンドボール協会フォトコンテスト審査委員会

[委員会メンバー]

専務理事／プロカメラマン１名／広報委員会より１名／指導委員会より１名

5、表彰

最優秀賞１点　表彰状と賞金又は記念品

優秀賞　３点　表彰状と賞金又は記念品

佳作　　　　　表彰状のみ

全日本総合時に最優秀作品の表彰と展示を行う。

6、その他

いずれの作品も機関紙等で広報し、あらゆる媒体へ提供し、ハンドボールの発展に寄与するものとする。

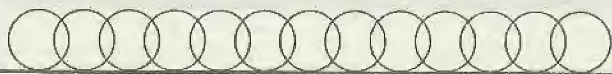
応募作品は返却しない。入賞作品の版権は日本ハンドボール協会に属するものとするが、作者の作品の使用は自由とする。

財団法人日本ハンドボール協会
「60周年記念誌」刊行!!

財団法人日本ハンドボール協会（60周年記念誌」が間もなく出来上がります。「50周年記念誌」発行以後10年間の〝日本ハンドボール界の歩み〟をまとめたものです。ぜひ、ご一読ください。

※詳細につきましては日本協会までお問い合わせください。　☎03－3481－2361

スカイ・Aでハンドボールを見よう！



スカイ・Aはケーブルテレビ、パーフェクＴＶどちらでもご覧いただけます。

ケーブルテレビでスカイ・Aを見る方法

お住いの地区にケーブルテレビがある。ない場合はパーフェクＴＶを選択！

ケーブルテレビはＮＨＫ・民放に加えＵＨＦ放送、ＢＳ放送やＣＳ放送を各ご家庭に配信しています。



地元のケーブルテレビ局でスカイ・Aが放送されているかどうかを確認！

ＣＳ放送である「スカイ・A」は全国235局のケーブルテレビで放送されています。



ケーブルテレビに加入の申し込みをする（地区によっては工事ができない場合もあります)。

※地区によって加入金・工事代・月々の利用料が異なります。お申し込み前にご確認ください。

※工事完了後は即ご覧になれます。

パーフェクＴＶで見る方法

まずパーフェクＴＶのアンテナを取り付けることが可能かどうかをチェック！

晴天時、午後１～３時に太陽が見通せる場所（南南西の方角）にアンテナが取り付けることができるかどうかを調べてください。前の建物で電波が遮断されているとアンテナはテレビ信号を受信できません。



パーフェクＴＶ専用の受信アンテナとデジタル・チューナーを最寄りの電器店で購入！

取り付け工事完了後、パーフェクＴＶカスタマーセンター（電話0570-039-888・営業時間9:00～21:00）に電話で「仮登録」の申し込みをしてください。



仮登録後テレビ70チャンネルとラジオ106チャンネルが２週間無料でご覧頂けます。

視聴を希望するチャンネルをこの期間に選んでください。スカイ・Aは285チャンネルです。



基本料金は290円と、お申し込みをしたチャンネル分だけ料金が必要です。

例えばベーシック系30チャンネルからお好みの12チャンネルを選んだ場合は、基本料金の290円に加え、1900円が別途料金となります（合計2190円／月)。スカイ・Aだけをご覧になりたい場合は基本料金290円とスカイ・A料金700円の合計990円／月となります。※消費税は別途必要です。

スカイA　3月放映予定

WCは世界選手権　JHLは日本リーグ

	大会	放映時間	カード	大会	放映時間	カード
1日	WC	13:00～14:30	フランスVS日本	WC	23:30～1:00	フランスVS日本
2日				JHL	23:00～0:30	湧永VS大同
3日	WC	15:45～17:15	アイスランドVSハンガリー	WC	23:30～1:00	アイスランドVSハンガリー
5日	WC	15:45～17:30	スペインVSスウェーデン	WC	23:30～0:45	スペインVSスウェーデン
8日				JHL	23:00～1:30	プレーオフ男女準決勝
9日				JHL	21:00～23:30	プレーオフ男女準決勝
10日	WC	15:45～17:15	韓国VSロシア	WC	23:30～1:00	韓国VSロシア
11日	JHL	19:00～21:30	プレーオフ男女決勝			
12日	WC	15:45～17:30	エジプトVSフランス	WC	23:45～1:30	エジプトVSフランス
14日	JHL	16:00～18:30	プレーオフ男女決勝			
15日	WC	17:00～18:30	スペインVSアイスランド	WC	1:30～3:00	スペインVSアイスランド
17日	WC	15:45～17:15	韓国VSエジプト	WC	23:00～1:30	韓国VSエジプト
19日				WC	23:30～1:00	エジプトVSアイスランド
20日				WC	21:00～22:30	エジプトVSアイスランド
21日	WC	15:00～16:00	スペインVS韓国	WC	1:00～2:30	スペインVS韓国
23日				WC	22:00～23:30	ハンガリーVSスウェーデン
24日				WC	23:30～1:00	ハンガリーVSスウェーデン
26日				WC	23:00～1:30	フランスVSロシア
27日				WC	23:00～1:30	フランスVSロシア
28日				WC	0:00～1:30	フランスVSハンガリー
29日				WC	20:30～21:00	フランスVSハンガリー
31日	WC	15:45～17:15	スウェーデンVSロシア	WC	23:30～1:00	スウェーデンVSロシア

スポーツ安全保険は、みんなの安心を約束します。



スポーツ活動、文化活動、ボランティア活動等に最適な保険です。

※5人以上のグループで御加入ください。

区　　分	掛　金	傷　害　保　険				賠償責任保険	共済見舞金
		死　亡	後遺障害	入　院	通　院		
子供のスポーツ活動等 成人の文化活動、ボランティア活動、地域活動	450円	2,000万円	最高 3,000万円	1日につき 4,000円	1日につき 1,500円	(補償限度額) 身体賠償 1人　1億円 1事故5億円 (免責1,000円) 財物賠償 500万円 (免責1,000円)	突然死 および 日射病・ 熱射病 による 死亡 140万円
老人のスポーツ活動	800円	500万円	750万円	1,800円	1,000円		
成人のスポーツ活動	1,400円	2,000万円	3,000万円	4,000円	1,500円		
山岳登はん等	9,000円	500万円	750万円	1,800円	1,000円		

対象となる事故

- グループ活動中の事故
- 往復途中の事故

保険期間

平成10年4月1日から
翌年3月31日まで(申込受付は3月から)

―― 加入用紙、資料の請求、お問い合わせ ――

〒150-8050　渋谷区神南1丁目1番1号　岸記念体育会館　☎03-3481-2431

財団法人 スポーツ安全協会

■3月行事予定

第21回全国高校選抜大会
3/24−28　愛知県体育館

求職情報

FIFAの代理店のIRUDIMEN社勤務しているJOSE ANTONIO REVILLAより、日本でプレーを希望する有力選手を紹介して来ています。

ゴールキーパー：Jaume FORT(INT. SPAIN)
　　　　　　　　Alexander BULLIGAN(INT. RUMANIA)
第　一　線：Mikhail IAKIMOVIC(INT. BIELORUSIA)
　　　　　　Andrei PARACHENKO(INT. BIELORUSIA)
　　　　　　Jose VILLALDEA(INT. SPAIN)
　　　　　　Josu OLALLA(INT. SPAIN)
　　　　　　Nedeljo JOVANOVIC(INT. YUGOSLAVIA)
　　　　　　Olej KISELEV(INT. RUSSIA)
第　二　線：Alberto URDIALES(INT. SPAIN)
　　　　　　Juric NESTEROV(INT. URSS)

詳細について日本協会へおたずね下さい。

平成10年度ハンドボール競技規則発売について

B6版70ページ
価　　格　1,200円
発売時期　平成10年3月1日
申込み先　(財)日本ハンドボール協会

CONTENTS　3月号

MIKASA®

明星ゴム工業株式会社

HAND BALLS

国際公認球

アデランテ 前進





ホワイト／ブラック



ホワイト／ピンク

PKCH3-AD ¥4,600

検定球3号，国際公認球，アデランテ，手縫い
一般・大学・高校・男子用，天然皮革
パキスタン製

PKCH2-AD ¥4,500

検定球2号，国際公認球，アデランテ，手縫い
一般・大学・高校・女子用，中学校用，
天然皮革，パキスタン製



ホワイト／ブラック



ホワイト／ブルー



ホワイト／ブラック



ホワイト／ピンク

PKCH3-BS ¥4,000

検定球3号，ビッグシュート，手縫い
一般・大学・高校・男子用，人工皮革，
パキスタン製

PKCH2-BS ¥3,800

検定球2号，ビッグシュート，手縫い
一般・大学・高校・女子用，中学校用，
人工皮革，パキスタン製

NEW



NEW





PKCH3-SRT ¥5,600

検定球3号，スエルテ，48枚パネル，手縫い
一般・大学・高校・男子用，天然皮革
パキスタン製

PKCH2-SRT ¥5,500

検定球2号，スエルテ，48枚パネル，手縫い
一般・大学・高校・女子用，中学校用，
天然皮革，パキスタン製

PKCH3-ADR ¥2,800

練習球3号，アデランテ，　手縫い
一般・大学・高校・男子用，合成ゴム
パキスタン製

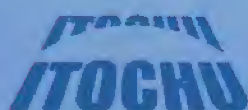
MIKASA®
明星ゴム工業株式会社

本　　社	／〒733	広島市西区楠木町3丁目11-2	TEL082（237）5145
東京営業所	／〒111	東京都台東区松が谷1丁目5-14	TEL03（3843）4671
大阪営業所	／〒543	大阪市天王寺区東高津町1-6	TEL06（761）8441
大阪物流センター	／〒577	東大阪市西堤本通東3-4	TEL06（781）4845
広島営業所	／〒733	広島市西区楠木町3丁目11-2	TEL082（237）4772
名古屋営業所	／〒460	名古屋市中区千代田2丁目24-8	TEL052（251）2381
福岡営業所	／〒812	福岡市博多区東比恵4丁目12-9	TEL092（431）6950
仙台営業所	／〒984	仙台市若林区卸町東4丁目1-8	TEL022（288）2361

(財)日本ハンドボール協会編 『ハンドボール』第三八三号
昭和四十年六月七日 第三種郵便物認可
平成十年二月二十六日印刷 平成十年三月一日発行
東京都渋谷区神南一－一－一
電話 代表 三四八一－二三六一
振替 〇〇一二〇－七－一〇二九三
編集兼発行人 中澤重夫
価格は登録金に含む

私たちにNOという商品はありません。

製品から、さまざまな仕組みやノウハウまで、
私たちは目に見えない商品もお届けしています。
国や産業という垣根も越えて、
用意している答えはいつでも、YES。
私たちは国際総合企業、ITOCHUです。



豊かさを担う責任。
伊藤忠商事株式会社

Visit our Internet site at http://www.itochu.co.jp